

の先鋒とした。かくて彼等は、あらゆる機關を利用して種族間の衝突を激成し、新疆をして次第に支那より離脱せしめた。即ち伊犁、塔城、迪化等の各地に共產黨の宣傳機關及び政治組織を設けて新疆ソヴェートの運動に従事し、新疆政權奪取の陰謀取をめぐらした。

民國十七年、楊增新が樊耀南に刺殺せられたのもソ聯領事の煽動によつたものであり、最近盛世才が馬仲英を敗つたのも、ソ聯の裏面における援助は少なくないといはれる。

ソ聯は軍事上廣汎なる價值を有してゐる。一九三〇年トルクシブ鐵道が完成し、モスクワから新疆までは、僅か三百日の行程に短縮された。モスクワから西トルキスタンのタシケントに至るものと、シベリアのノウシビリスクに至るものと三角形を成し、その軍事上戰略上の地位は、新疆に對して一大脅威を與ふに至つた。

翻つて新疆と支那内地間を觀るに、一條の軍用鐵路がないのみならず、一條の車馬を通ずる公道だにない有様である。支那本土から新疆に行くには少なくとも數ヶ月を要し、遙かにモスクワから新疆に至るの便利なるに如かない。而も軍事上重要な位置を占むる伊犁

塔城、承化等の地は、地勢の關係から内地と交通斷絶してゐる。即ち一旦有事の際、軍隊兵糧の輸送、月を重ねても及ぶまい。

これに反しソ聯側は、モスクワより出兵すると假定して朝に發して夕に到達すべく、手に唾せずして長驅新疆の腹部たる省城迪化に入ることを得る。民國十八年東支鐵道の事變が起きた際、一時ソ聯軍隊の新疆侵入説が盛んに傳へられたが、これらは決して架空の説ではなかつたのである。

英國に至つては、支那の藩屬であつたアフガン、拉達克、乾笠特を併合した後、その中央アジアにおける勢力は益々鞏固を加へたが、一方ロシア勢力が南下し、やがて英國領土に及ばんことを慮つた結果、遂に支那領土内において互に相抗争せる局面を展開した。その結果光緒二十二年（一八九四年）ロシアと私かに支那の要塞帕米爾を分割奪取した。蓋し帕米爾は要隘の地で、南は因都庫什山を踰えて英領に達すべく、東はヤルカンドを経て新疆、西藏に至ることを得、北は阿賴嶺を越えて露領中央アジアを窺ふことの出来る中英露

三國出入の門戸である。英國は、その全部を奪取することが出来なかつたが、一半を得たので攻守の用とするに足り、ソ聯に抵抗し且つ自國の植民地を保護し、或は更に直ちに新疆に入り豊沃なる土地をも瓜分することを得る立場に到達した。

かくて英國は、新疆を奪取するには先づソ聯の勢力を驅逐し、同時に支那の政權を推翻せなければならぬと考へた。近く數年來ソ聯勢力の膨脹は英國に少なからぬ不安の念を抱かしめたが、一方支那政權の積弱は後の野心を増長さすに十分であつた。こゝにおいてか一面反共產主義のスローガンの下に反ソ戦線に立直り、以てその印度西藏における勢力を鞏固にせんと企て、一面新疆の複雑なる種族と混亂状態を運用して分化政策を實行せんと圖つた。先年來新疆の變亂がこれら國際的背景の下に行はれたのは、南疆カシユガルの獨立運動に見ても明瞭なる事實である。

更に英國は、一九三〇年スタイン博士 (Amel Stein) を新疆に潜入せしめ、天山附近において油田を發見し、土地所有者カシユガル人と私かに採掘の契約を結んだが、その後支那側の知るところとなり、嚴重なる抗議によりこれを撤回したことがある。又一九三一年には英國印度政府から陸軍武官スチュワート (Stewart) を派し、新疆探險隊を組織し飛行機自動車まで用意して新疆の精細なる地圖を作成し、同時に政治、軍事、經濟に關する調査を行つた。その吐魯蕃暴動の際英國の退役軍官が加入してゐたことなどに徴し、英國の新疆に對する活動は掩ふべからざる事實で、カシユガルの英國領事館及び印度の軍政部はこれら陰謀を指揮する總本部として知られてゐる。

(ロ) 經濟と農業關係

新疆は土地肥沃にして物産に富み、久しく外人の覬覦するところである。ソ聯は歴史的にも地理的にも此の地において優越の地位を占むる關係から、農工商金融交通といはず、すべてをその支配下に收めてゐる状態である。特に商業上の勢力に至つては最も恐るべきものあり、歐洲戰前、露人は伊犁條約の特權を恃み新疆省内に横行濶歩し、省内の商務は全く露人の入手するところとなつた。

一九一三年の統計によると、露國より新疆への輸入八、四二四、〇〇〇留、新疆より露國への輸出九、八四六、〇〇〇留で、總額一八、二七〇、〇〇〇留を示してゐる、前者は麥粉、砂糖、茶、鐵、木材、布匹、金屬類、器具、石炭、マッチを主として後者は棉花、羊毛、毛皮、絨毯、粗布、乾果、麥粉、家畜、絹等を主とする。

歐洲大戰の際、露新聞の商業は停頓状態に陥つたが、一九二六年に及んで再び原狀に恢復し、同年新疆よりソ聯への輸出一〇、三三一、〇〇〇留、ソ聯より新疆への輸入六、〇九二、〇〇〇留、總額一六、四二三、〇〇〇留に達し、一九二七年にはソ聯新疆の貿易總額二四、〇〇八、〇〇〇留に達し、戦前の數字を突破し、更に一九三〇年には、ソ聯より新疆への輸入一五、二〇〇、〇〇〇留、新疆よりソ聯への輸出一六、七〇〇、〇〇〇留、總額三一、九〇〇、〇〇〇留に達した。これを以ても、ソ聯商工業の發達狀況を知ることが出来るが、一方、トルクシブ鐵道の完成及び新露密約の締結はこれと重大なる關係あり、ソ聯の新疆經略に對する大成功といふことが出来る。

一九三〇年、金樹仁はソ聯との間に非法商約七條を締結した。その要點は、

- 一、従來の塔城、霍爾果斯、阿木克、塔木の外に圖魯阿提、烏什、吉木乃を開放して通商市となす
- 二、ソ聯商人の自由往來貿易するを准す
- 三、關稅は特別待遇とす
- 四、新疆各大城市にソ聯の貿易機關設立を准す

かくて新疆の西境は完全に開放され、露人の勢力は奔流の如く殺到して來た。即ちソ聯はこれらの貿易によつて市場を把持する以外、伊犁、塔城、喀什等の他にソ聯銀行の分行を設け、迪化にも遠東銀行の支店を置き、紙幣を發行して商民に貸與し、新疆の金融を壟斷した。又各大城市にはソ聯の郵便電信局を設け、商況を通信する外郵便物の發送をも掌り、支那の交通制度は全く破壊されてしまった。かの伊犁一帶の森林の如きも彼等のため自由に採伐され、アルタイ一帶の金鑛、迪化の油田の如き均しく彼等によつて大規模の採掘が行はれた。

更に新疆の貨幣が廢紙同様となつてゐるのに乗じ、ソ聯商人は鞘をとることを考へ、貨物を購ふ時は省票を以て支拂ひ、賣る時は貨物と交換する方法をとつた。昨年羅文幹が新疆視察に赴いた時、迪化において自動車のガソリンが盡きた際の如き、羊二萬頭を以てガソリン五百桶と交換したことがあるが、これらはその顯著なる例である。

英國の新疆における經濟侵略は、ソ聯の露骨なるに如かないが、併しその基礎は相當に鞏固なもので、南疆各地の都市は大部分その勢力下に收められてゐる。尤も、近年來ソ聯勢力が著しく發展し來つてその市場を奪ふ形勢があるが、英國としてもカシユガルに領事館を設け、一方英印商人を指導して貿易計劃を樹て、積極的發展策を講じてソ聯の勢力に對抗してゐる。

英國は、一方新疆における複雑な民族及び宗教の統一しないのに乗じ、常に挑發を事とし國民を煽動しては變亂を起さしめ、又西藏人の喇嘛教と、印度人のバラモン教が新疆に相當の勢力あるを利用してゐる。即ち、南疆における印度人が農工商各界に少なからぬ努

力あるを利用し、英國は彼等を新疆侵略の道具に使ひ、又は宣傳係員とし或はスパイとして英勢力の擴張につとめてゐる。

(三) トルクシブ鐵道と新ソ經濟關係

ソヴェート聯邦の經濟勢力が最近急速度を以て新疆を風靡したことに就ては、種々の原因を擧げることが出来るが、(例へば新疆省に於ける政治の腐敗、民智の固陋、資本の缺乏等々)交通の便の開けたことを第一に推さねばなるまい。ソヴェート聯邦は一九三〇年四月、トルクシブ鐵道を完成し、以て西比利亞とトルキタンとを結んだ同鐵道は西比利亞鐵道中の一驛ノヴォシビリスクに發し、之より南下して中亞トルキスタンに至るもので、延長二千五百九十九公里に及ぶが、新疆の外縁に平行して蜿蜒七百餘公里を走り、恰度大規模に之を包圍してゐるやうな恰好である。本線上次の三大驛は、各々新疆省内の三大都市に連絡するものである。

(一) アイクターワ——塔城、五百三十九支里。沿道平坦にして走行に便、現に自動車輸送を実施し、短時間を以て兩地を連絡してゐる。

支那本部より西比利亞鐵道經由、新疆に入らんとする者は本驛で下車、自動車に乗り換へることになつてゐる。露人は近々兩地を結ぶ愛塔支線を建設する計畫ありといはれる。

(二) アルタイ——伊犁、自動車連絡を行ひ、五日間の路程である。又伊犁河により、小汽船を以て輸送に任じてゐる。矢張りソヴェート側に阿伊支線建設の意圖があると云ふ。

(三) アンディジャン——カシユガル、千四百七十支里。沿道平坦で、往來頗る頻繁である。但し國境附近の山岳地帯は積雪量多く、氣温酷烈である。

右に述べた三道は、トルクシブ鐵道建設以前より存するもので、従前より兩國間の交通の要道であつたが、同鐵道が完成してからは、運輸の便が極めてよくなり、露貨の流入ひきもきらず、正に前掲貿易表所掲の盛觀を呈してゐる。民國二十年以後露貨の輸入が激増したのは、一に上記三道路の輸送が便となつたからであらう。

新ソ間の交通が斯くの如くであるに反し、支那本部と新疆との交通は、全くなつてゐな

い。新疆省に入るには、隴海鐵道終點の潼關又は平綏鐵道終點の包頭を出發點として、三大道があるが、何れもソ新交通路に較べれば距離も遙かに遠く、且つ道路險阻である。

(一) 陝甘大道、潼關より西安を経て、西北甘肅省臬蘭に入り、更に酒泉より安西に至り、此處より二股に分れる。西北路は隗々狹經由哈密に至るもので、全長約四千〇二十五支里。西南路は安西より燉煌を経て天山南路に出る。沿道は陝西、甘肅兩省内に在りては山岳嶷々として頗る難關、加ふるに盜匪横行して旅行は極めて不安である。

(二) 内蒙小草原道、包頭より百靈廟に出で、西方内蒙を迂回して小草原、達爾罕旗を通り、沙漠を経て哈密に至るもので、距離七千五百四十支里、匪賊の憂はないがゴビの難路を通らねばならぬ。

(三) 外蒙大草原道、包頭或は歸化城から西北庫倫に赴き、西折して列克經由奇臺に至る全長五千〇九十支里。此の通路もゴビを横斷するものであるが、外蒙がソヴェート聯邦支配下に入つてよりは完全に封鎖され、今日では利用し得ない。

右に述べた三大道の内、陝西、甘肅經由のものは極めて難行、外蒙迂回のものは今日不通であるから、残す所は内蒙小草原道あるにすぎぬ。此の道路は春秋二季駱駝隊商の往復

する處で、その實狀を視るに、綏遠を三月出發すれば新疆に六月着、新疆を八月出發すれば綏遠着十一月といふ有様で、一年僅か二回往復し得るにすぎない。最近は綏新汽車会社が新設され、自動車五十輛を具へ、哈密、迪化の兩地に通じてゐる。之によれば綏遠哈密間僅か十四日で連絡することが出来る。

新疆土産の棉花、砂金、羚羊角、皮毛、乾葡萄等、或は北方洋廣雜貨、布匹、煙草等何れもこの便に依て輸送を行つてゐるが、何分距離頗る遠いのと運賃高く、且つ途中破損の憂があつて、輸送貨物は數倍の高値を稱へてゐる現狀である。従つて至便の交通路を有する露國と太刀討することは到底出來ず、支那本部より新疆向の貨物は日に日に減少しつつある有様で、支那商人も漸次その姿を没してしまつてゐる。斯くの如きが原因となり、結果となつて、今日ソヴェート聯邦の新疆市場壟斷を實現せしめたわけである。

第四節 赤化新疆の一断面

(一) 國際幹線の完成

早くからソ聯の統制下に置かれてゐた新疆省は、最近に至つて愈々ソヴェート・トルキスタン共和國としてソ聯邦に加入したと傳へられる。が、世間は決してこれを問題にしない。土地僻遠で直接自己の存立に影響がないと思つてゐるのかも知れない。それとも、ソ聯の巧妙なる侵略政策はいつも無言に實質的に行はれるので、真相が未だ外部に知られてゐないからかとも思ふ。併し、何といつても全面積百八十七萬平方軒、支那本部面積の三分の一にあたる廣大なる地域が、支那を離れてソ聯に歸したのである。而も場所はアジアの中心だ。これを對岸の火災視してよいものであらうか。さすがに支那は狼狽してゐる。が、これを阻止するにもその方法がないらしい。

新疆のソ聯加入は、直ちに外蒙と連つて支那西北を赤色に彩る。而もソ聯の意圖は僅かに新疆の赤化に止らない。更に青海を、甘肅を、そして四川を目指してゐる。支那共産軍

が舊臘以來大舉西進、四川に集結したのは何を物語るか。スターリンの所謂『支那共産軍の寢據として四川は絶好の地である』との言に基いたもので、コミンテルンの指令の下、その邊疆集中を斷行しつつあるのである。

新疆に足場を築いたソ聯が、四、甘の共産軍と完全なる聯絡をとつたとき、西北支那は最早支那ではない。そこには支那の版圖を二分した彪大なる赤色帝國が實現する。やがて彼等の「呪ひの焰」は、北より西より、燎原の勢ひを以て支那本土を焼き盡さすには置くまい。

支那邊疆研究の權威オウエン・ラティモアは嘗てかういつた。

『支那の邊陲統治の威信が衰へるのは、實は、支那と邊陲の貿易が次第に衰微するためである。本國が邊疆に對して威信を失ふ一例を挙げれば、新疆は、その境界線から僅か五十哩出づればロシアと自由に交易することが出来るが、でなければ、六千哩の路程を経て初めて支那の市場に達することが出来る。だから經濟上からいへば、新疆は已に、ロシアの

經濟勢力が壟斷するものであるといつても過言でない。新疆と支那とは單なる政治上の關係にしか過ぎないのである』と。

又曰く、『新疆と外國との關係は、北部にあつてはロシアと接觸し、西部にあつては印度を通じて英國と關係を發生する。東部にあつては支那と接近するが、新疆中での肥沃の區はロシアと比隣し、沙漠礫瘠の地のみが支那に接してゐる』と。ラティモアの言を俟つまでもなく、新疆は地理的にも交通上からも、すべてロシアの影響を受くことが多い。

新疆と支那内地間是一本の鐵道だになく、一條の完全したる道路だにない。支那本土から新疆に行くには百日を要するが、これに反しロシアのトルクシブ鐵道によるときは、國境線から新疆の塔城まで自動車で數時間にして達することが出来る。この一事だけでも支那は新疆に對して發言權はない譯で、たゞ地圖の上から支那の領土になつてゐるといふに過ぎず、實質的には、早くからロシアのものであるといへる。

ロシアは中央アジアのソヴェート邊疆を保ち、一方外蒙のために新疆を必要とする。そ

こへもつて来て、滿洲國の新生によつて北方よりする國際路線の進路を阻まれた。ロシヤは當初、一は外蒙から滿洲へ、一は外蒙から内蒙を経て河北、山東へ出る國際路線を企圖したのであつたが、滿洲國の出現によつて東方への進路を遮られたので、今度は是が非でも新疆を赤色に塗りつぶし、支那中原を横斷して太平洋へ出る赤色幹線を完成せねばならなくなつたのである。

ところが一方、英國また印度を保ち、西藏を固むるために新疆を必要とした。さうした世界政策の遂行は、當然の歸結として新疆を舞臺とする英露兩勢力の白熱せる抗争が描き出された。この抗争は昨夏回教軍馬仲英の敗退、邊防督辦盛世才の新疆統一によつて英國は完全にノックアウトされ、ロシヤ側の壓倒的勝利となつて結末を告げた。即ちロシヤの新疆における經濟的地盤はこゝにおいて確立し、その赤化工作の第一段階が達成されたのである。

(二) 新疆の争亂

ロシヤが新疆に着目したのは遠く帝政時代からであるが、その後楊增新が新疆の督軍であつた一九二一年、ソ聯との間に伊寧通商條約が成立した。しかし、この條約の範圍は僅かに伊寧一隅に限られ、新疆全般には及ばなかつたのである。

次いで翌年、ロシヤは代表を迪化に送つて全境に及ぶ通商條約の締結を迫り、一九二五年關稅問題が持ち上つたのを奇貨とし、一舉に塔城、迪化、カシユガルの三地における通商の權利を獲得した。かくてロシヤは、赤軍ゲ・ベ・ウの庇護の下に各重要都市に通商代表を派遣し、その後しばらく省長を壓迫して通商代表をソ聯領事に改め、省内の混亂に乗じていよく新疆の乗取りにかゝつた。

爾來ロシヤは、新疆においてつとめて叛亂を激成し、その疲弊に亂じて漁夫の利を占めんとする政策をとつた。即ち一方政府軍を援け、他方また叛軍を援助してその抗争を激化

せしめた。

一九三一年新疆における争亂の火蓋は切られた。かの邊境の革命兒、回教徒の馬仲英は主席金樹仁の虐政に反抗して起ち、「新疆を回教徒の手に返せ！」「漢人を殺せ！」とのスローガンをかゝげ、風を望んで集つた約四千の回教徒軍を提げて、嵐の如く甘肅から新疆の哈密に殺到した。

この形勢を見てとつたロシア當局は、急遽迪化領事に密電して主席金樹仁に武力援助を乞はしめ、飛行機三臺の外、機關銃その他多數の兵器彈藥を供給して漸くこれを鎮定せしめた。ロシアはこの武力援助を以て金樹仁に恩を賣り、新たに通商條約を迫り一九三一年十一月一日、ロシア代表スラウスクは迪化において省政府外交特派員陳繼善と會商して、秘密協定に調印した。その密約の内容は次の如きものである。

- 一、迪化、伊犁、喀什噶爾の諸市に商業代表機關並にその他重要都市に決算事務所を設置する権利
- 二、前記諸市間(事實上新疆全土)の各地點における自由交易の權利並に商業上の目的のため商業代表

及びソ民自由移動の權利

- 三、新疆ソ聯領域間の主要電線設置
- 四、迪化、喀什噶爾の「ラヂオ」放送局設置並にソ聯領域放送局との通信權
- 五、新疆省内運輸、電化、農業方面の援助を與ふる目的を以てする専門家派遣

この協定は當時中央にも報告されず、金樹仁が脱走した後、中央からの宣撫使黃慕松が新疆に赴いて初めて發見されたもので、全く新疆省政府とロシアの密約である。ロシアは以上の如き權益の獲得に加へ、五ヶ年計劃による中央アジア方面の根幹線トルクシブ鐵道の急速なる完成と相俟つて、新疆に對する積極的經濟進出を企圖した。これがため新疆との貿易は漸次増加し、一九三三年には新疆貿易の九割を獨占するに至り、新疆はますます支那本土から離反する情勢を誘致した。

(三) 回教軍の首領馬仲英

回教軍の首領馬仲英は今年二十五歳、鐵火のやうな性質の男である。十五のとき軍に従

ひ、二十三の時には新編邊防第三十六師の師長となつた。近代教育もなく、政治思想もない一介の武弁に過ぎないが、回教民族の窮迫を救ひ、「回教徒の新疆」を作り上げるといふことには殉教的の精神に燃えてゐた。彼が漢人を憎むことは仇敵以上である。「新疆の回教徒よ起て！」漢人を屠れ！」左にコーランを右に劍を掲げ、彼は阿修羅の如く邊境の山野を荒れ廻つた。

哈密の東に小舗といふところがある。そこに駐屯してゐたある漢人の將校が、土地の回教民の娘と通じこれを脅迫して妻とした事件があつた。回教民が漢人と通婚することは回民にとつて一大耻辱である。回民は結束して起つた。暴徒は雪崩れを打つて小舗の漢軍陣營に殺到した。不意を喰つて逃げまどう漢人共の武器を奪ひ、漢人といふ漢人を片つぱしから虐殺した。かくて哈密城外は忽ち血の海と化し、滿城鬼哭啾々、實に凄慘なる光景を呈した。一九三二年二月二十七日のことである。これが有名なる小舗事件、新疆事變の發端をなした回民の漢人大虐殺である。

小舗事件を發端として、新疆における回教徒の叛亂は全面的に擴大した。哈密に進撃した馬仲英は一旦敗退したが、一九三三年四月再び陣容を整へて前進を開始した。新疆の形勢頗る危急を告ぐる時、省城迪化では突如反省長派の陰謀になるクーデターが行はれ、主席兼省長金樹仁は四月十三日遂に迪化を脱出して塔城に逃れた。かくて教育廳長劉文龍は臨時省政府主命に推され、南路剿匪總指揮盛世才は臨時省督辦となり、新疆軍務を掌握した。

新疆の政變に驚いた南京政府は、同年六月初旬、參謀次長黃慕松を迪化に急行せしめ、金樹仁を罷免すると同時に軍隊を整理してこれが政治的解決を圖らんとしたが、盛世才はこれを喜ばず、黃に反對的態度を示したので、黃は策の施しやうなく、そのまゝすこく飛行機で南京に引返した。その後、前外交部長羅文幹また更に入疆したが、これまた反對され、露領を迂回して辛ふじて歸來するを得た。

かうして新疆は、半獨立の形でその實權は全く盛世才の手中に歸し、彼は一萬七千の省

政府軍を率ゐ、ロシヤからの直接間接の援助によつて全新疆に號令するに至つた。

この間、馬仲英は回教軍約二千を率ゐ、哈密の回教主聶滋爾を擁戴し、哈密を中心として盛世才の省政府軍と對抗を續けた。これに對し拔目なきソ聯當局は、盛世才を支援する一方叛軍たる馬仲英にもある種の援助を與へ、龍虎相闘はしめて新疆の疲弊を待つといふ極めて狡猾な政策をとつた。

ソ聯の援助を得た馬仲英の形勢は、果然有利となつた。かくて一九三四年二月、彼はいよくその根據地たる哈密から前進、省城迪化に迫つてこれを包圍した。併しこの戦は馬にとつて致命傷を齎らした。彼は盛世才の猛烈な反撃に遇つて一敗地に塗れ、旗を捲いて南新疆に遁走するの已むなき運命に立ち至つた。彼の敗殘兵が喀什噶爾の英國領事館を襲撃したと傳へられたのもこの時である。

勝ちに乗じた盛世才の省政府軍は、これを追撃して長驅喀什噶爾の近郊伽師まで追撃し七月下旬、部下の馬紹武軍をして仲英を莎車に追ひ詰め、回教徒全軍の武装解除を敢行し

た。かくて、馬仲英は遂に甲を脱いで盛世才の軍門に降り、彼自身は、ソ聯領事館の庇護によつて辛ふじて一命を全うし、領事館衛隊によつてロシヤ境内に護送された。

これより先、一九三四年一月、英國を背景として喀什噶爾にサピト・ドムラを首領とする回教王國、支那トルキスタン政府が樹立されたが、僅かに半載、馬仲英が迪化攻圍戦に敗れた時、早くすでに解消し、首領ドムラは行方不明となつた。

馬仲英軍を撃滅した盛世才は、八月六日左の如く發表した。

『叛軍馬仲英の殘黨は全部武装解除の上解散せしめ、南新疆は完全に平定した。目下馬紹武をして喀什噶爾行政局長官に任じ、劉斌を警備司令官として治安の維持にあたらしめてゐる』

これと同時に印度シムラから『支那兵二千四百人は八月七日カシユガルに入城、地方は安靜に歸した』との情報があり、新疆における叛亂とこれに伴ふ英露の抗争は、漸く結末を見た。英は敗れソ聯の覇業は成つた。ソ聯の經濟的地盤はこゝに確立され、いよく全

新疆の獨立、赤化工作に乗り出すに至つたのである。

(四) 盛世才の全疆統一

盛世才は一九三一年四月、自ら新疆邊防督辦となつて兵權を掌握したが、その後彼は屢々モスクワに密使を派して、ソ聯から兵器の供給を仰いだ。それらの兵器は表面ロシヤ側から購入したと稱してゐたが、その實兵器と共に軍隊まで借りて來た、所謂「白露歸化軍」と稱するものである。

張培元が殺されたのも馬仲英が敗れたのも、皆なこのソ聯供給の武器と「歸化軍」の力戰の結果であると傳へられてゐる。この「歸化軍」の正體は何であるか、それはいづれも紅毛碧眼の一隊であつたといふからには、それが白であるか赤であるか、敢て問ふにも及ぶまい。

盛世才は馬仲英を破つた當時、支那政府に對し「我れ新疆の叛徒を平げ全疆を統一せり」

と、鼻高々に報告したものであつた。が、すぐその後には現はれたものは新疆の封鎖政策であつた。かくして新疆と支那内地との交通は完全に遮斷された。それは盛世才自身の意圖であつたか、ソ聯が盛を強迫して行はしめたものか、その邊は不明であるが、現實の問題として、新疆と支那との聯絡は絶たれてしまつたのである。

新疆封鎖政策の結果は、先づ歐亞聯絡の航空線が阻止された。歐亞聯絡機に對し新疆當局は入境を許さぬと發表した。同時に新たに來らんとする支那人は入疆を禁ぜられた。それは恰も、外蒙にソヴェート政權が樹立されて庫倫が封鎖され、一切の支那人及び外國人の入蒙が不可能となつたのと同じ手段である。

恰もその頃、赤衛軍二個師團が新疆に入つたとの報道があつた。そしてソ聯からは更に大量の飛行機と武器とが新疆に到着した模様である。形勢の急なるを見て泡を食つた支那中央政府は、矢庭に新疆建設委員會を中心に緊急會議を開き對策を討論する一方、矢繼早やに新疆省政府へ急電を放つて真相を確めたが、それらの電文は着いたものか着かぬもの

か、何等の應答をも得られなかつた。

やがてソ聯は、省城迪化に政治監察總監理局を設け、直接新疆の内政に干渉し出した。國民政府任命の省政府主席以下各官公吏は、ソ聯當局の同意なくしては何事も行ひ得ざる状態となつた。かくして新疆はソ聯の積極的工作によつて、着々ソヴェート政權樹立の段取りが進められた。

(五) 支那政府對策なし

新疆が今日の状態に立ち至るは、識者の已に早く豫見するところであつたが、支那政府は本土の内争にこれを顧る追なく、いつも、二階から眼藥式の糊塗政策を以てお茶を濁した。或は土地僻遠にして長鞭馬腹に及ばざる恨みがないでもないが、事竝に至るまで無爲無策、殆んど坐視して顧みなかつたのは迂濶といはれても仕方があるまい。

が、實際問題として現在の中央政府では、よし本氣になつて對應策を講じて見たところ

で、これが防止のための軍隊が派遣し得るでなし、それかといつて黃慕松、羅文幹の如き宣撫使を派遣しては見たものゝ何等の効果がある譯でなし、結局たゞ成行に委すより方策がなかつたのである。それに何等かの方法を講ずるといつたところで、支那中央部から新疆省城まで行くには三ヶ月を要する状態である。而も蔣介石政權の威令は四川までも及びかねるといふ有様なのだから、たとひいくら力んで見たところで仕方がない譯である。

新疆の赤化はやがて邊疆における英露の新たなる抗争を醸成し、同時に陝西、甘肅、四川等、西北支那の赤化を誘導する。江西の赤都瑞金を放棄した支那共産軍は、いまや大舉して川甘陝地方に集中しつゝある。彼等が江西の根據地を棄て、川甘集結を企圖したのは決して蔣介石の壓迫を逃れるためではなく、スターリンの所謂「經濟封鎖の憂なく、新疆外蒙を通じロシアの援助を受ける便利」に基き、中央地區の狹隘なる殻から抜け出して、蔣介石勢力の壓迫なき廣大なる邊疆地區に雄飛せんとするものである。

四川の共産軍は、やがて陝西、甘肅、寧夏方向を包括し、外蒙新疆を連ねてこゝに西北

邊疆の一大ソヴェート區が實現するであらう。かくてロシヤの極東赤化工作は、支那の外廓を半圓形に浸蝕してその第一段階を完成することとなる。

(六) 新疆省政府の現狀

現在新疆政治の最高組織は、表面軍民分治を標榜して居り、省政府と邊防督辦公署が各々政治、軍務の最高機關として併置されてゐるが、實際は政、軍一切の大權は邊防督辦盛世才の掌中に收められてゐて、省政府主席は徒らに空名を擁し、督辦の鼻息を窺ふに汲々たるものがあり、主席とは南京政府が任命した名ばかりのロボットに過ぎないのである。かゝる省政府の下に民政、財政、教育、實業、建設の各廳があり、主席李溶を戴いて省政を掌理して居る。こゝにその職員を示せば、

政府主席	李 溶
同副主席	和加尼牙子

民政廳長

彭 昭 賢

財政廳長(兼外交署長)

陳 德 立

教育廳長

張 馨

實業廳長

郁 文 彬

建設廳長

高 惜 冰

邊防督辦

盛 世 才

といふ顔觸れであるが、主席の李溶はすでに白髪を交へた老人で、一九三四年前主席劉文龍の後を襲つたが、嘗て彼は民衆大會の席上で、「余は督辦によつて主席に任命されたものである」と演説し、自らのロボットたることを告白したことで有名だ。爾來民衆は彼を呼ぶに「低腦主席」の綽名を以てし、今日では全く無能の折紙が付けられてしまった。

この外新疆には回教徒を籠絡する政策の下に副主席といふ官職が設けてあり、これには和加尼牙子が纏回の首領であるところから任命された。民政廳長の彭昭賢はモスクワの留

學生で盛世才の親友であるが、現在では辭職し李溶がこれを兼任してゐる。財政廳長兼外交署長の陳德立は、迪化にあるソ聯領事の一使用人に過ぎないソ聯の傀儡であり、教育廳長の張馨は兩眼失明して人杖を頼りに歩行するといふ状態の廢人、實業廳長の郁文彬は纏回族の出身、建設廳長の高惜冰は中央から派遣されたものであるが、いつも啞の如く黙りこくつて、たゞ追隨これ事としてゐる。

なほこの外、各廳の副廳長には多くは纏回族を置き、而して省政府及び各廳にはモスクワから派遣された顧問が一名乃至數名入り込んで、實際上の政務を操縦してゐる。

(七) 絶對權を有する政治管理局

右省政府に併立して邊防督辦公署と、ソ聯の色彩極めて濃厚な新疆政治監察總管理局がある。而して省政府が單なるロボット的存在であるに引換へ、この兩者は絶大な權力を有し、殊に特殊組織である管理局は新疆赤化の總本部とも見做され、極めて活潑な働きを見

せてゐる。この管理局の内部組織は總務、政治、軍事、經濟、國際、検査の各科から成立して居り、各科には別に特務隊と稱する特別機關が設けられてある。

この特務隊は新疆全省の鎮壓を目的とし、共產主義に反抗する分子を肅清するための特殊使命を有する一種のゲ・ベ・ウで、その權力の絶大なることは驚くべきものがある。監察管理局の局長はソ聯に籍を有するボゴニンで、副局長には青年急進派の張英吾、總務科長には上海人で共產黨の著名なる闘士、嘗て外蒙獨立を煽動した大物の一人である王立祥があたつてゐる。王の主張するところは漢人商人の屠殺であり、從來彼の手にかゝつて生命を殞した漢商は、その數幾何なるを知らずといはれてゐる。

新疆督辦の盛世才は、嘗て彼が回教軍の馬仲英と對峙した際、ソ聯の援助によつて初めて馬を驅逐することを得たので、この恩恵に報ゆるため赤軍の入疆を容認し、遂に今日の局面を造成した元兇である。督辦公署には八大處を設けられ、その中にはソ聯赤軍中將の軍事顧問一名、少將顧問二名がゐりて一切の軍事を擔當指揮してゐる。又公署は航空學校、

軍官學校、憲警學校等の各機關を直轄してゐるが、これには何れもソ聯赤軍將校の顧問及び教官がそれ／＼指揮訓練に當つてゐる。かくの如く現在の新疆省は、表面軍民分治の機關を有するも、實際において新疆存亡の鍵を握つてゐるのは、迪化駐劄のソ聯領事及びモスクワの赤色政府である。

第四章 秘境西藏の將來

第一節 鎖國西藏を語る

國境を監視する二つの影——それは西藏が今日なほ世界の秘密國として永遠の謎をどゞむる正體である。「二つの影」その一人が喇嘛であり、他の一人が支那人であるはいふまでもない。

喇嘛は異教徒の侵入せんことを慮り自らの宗教を守護せんがために、支那人は外敵の國境を越えて忍び寄りらんことを恐れ、絶えず警戒の手を弛めない。一は自護的本能より、一は恐怖的猜忌より、西藏の門戸を永遠に鎖してしまつたのである。その昔、四川と西藏の境界線巴塘（現在の西康省）には大きな界碑があつて、四川から來た異國人が碑の西側へ一歩踏み出したが最期、バサリと首が打落さるゝといふ話があつた。それほど西藏は鎖國

主義で異人種の入境は困難とされてゐる。

歐洲人で、嘗てこの國に入り慘刑に遭つたものが少くない。一八九四年ラインス氏、一八九九年ヘンリー・サベージ・ランドル氏はいづれも殺戮され、一八九八年には宣教師ピーター・リジンハート氏が行方不明になつた。尤も、遠い昔はそれほど危険でもなかつたやうで、一三二三年にボルデノレの僧オードリック・オブ・バルテン、一六二四年にはデ・アンドラーダが印度から入國し、一六三一年にはフランシスコ・デ・アゼウエドが入國して旅行記を著し、その後も幾多の入藏者があり、色々な旅行記が著されてゐるが、最近では一九〇九年から一三年に亘る四ヶ年、中央アジアから西藏を探検したスエン・ヘディンの旅行記が最も著名である。

我國で西藏に入つた人に青木文教、多田等觀、河口慧海の三師があり、文教師は四年、等觀師は八年も拉薩に滞在して秘密國を研究した。現に西藏軍の用ゐてゐる軍旗は、青木文教師が考案したものだといはれてゐる。



新疆に使者の羅文幹(前外交總長)を運んで甘肅省
蘭州に陸上機を亞聯絡機



西藏拉薩外郊「布達拉山」の「赤宮殿」

このやうに入國が困難であるのは、鎖國のためである外に、西藏への交通が地勢的に不便であることもその主なる原因であらう。

(一) 地勢及び交通

西藏は中部アジア大高原の南部に位する世界最高の高原地帯で、崑崙、ヒマラヤ二大山系の間に位置を占めてゐる。西藏高原は東西に並行する幾多の褶曲山脈があり、同じ高原でもアフリカやアラビヤのやうな平坦な高臺ではなく、一大褶曲地帯である。これら並行山脈の間は崖錐、沖積狀地及び砂礫等に埋められて、東西に延出せる窪地をなし、荒寥たる高原性ステップ、砂礫性沙漠、鹹性沙漠、鹹性濕地又は丘陵性濕地をなしてゐる。その平均高度四、五〇〇米、山脈は五、〇〇〇乃至六、〇〇〇米である。

西部、中部、北部は所謂チャンタン（北方平原）と稱する地域で、南はトランス・ヒマラヤから北は崑崙に至り、西は西藏國境から東は東經九一度の子午線に達する。本地域は

ステップ性湖沼の多い地域で、その殆んど全部は樹木線を越え、雨量少なく沙漠性ステップをなしてゐる。

南部はトランス・ヒマラヤとヒマラヤの間の大谿谷地帯で、ブラマプトラ、インドス、サントレジ諸大河の上流地方で、南部アジア季節風の影響を受け、縁邊地域に移化したところである。

崑崙山系

崑崙は西藏北境をなす大山脈で東經七六度に起り、支那に入つて秦嶺、伏牛山となるアジア最高の山脈で、大體北方に凹面を向けた弧狀山脈をなし、單一な幅廣き山脈で六、〇〇〇メートル以上の高峰が多い。中部崑崙は幾多の並行山脈からなり、最も複雑な地形をなす。南部崑崙は柴達木盆地と西藏の境界をなす山脈で、これが崑崙の主脈である。高度も北部にまさり、北部崑崙は甘肅省蘭州の子午線で終るが、南部崑崙は一度黄河の横谷に切斷され、更にジュバル山脈となり東部崑崙につゞいてゐる。

柴達木盆地は南北崑崙の一大窪地で、海拔二、五〇〇米乃至二、七〇〇米、南北二部に分れ、南部は鹹性濕地をなし山麓には蒙古族が遊牧して居るが、北部は鹹性沙漠で殆んど無人の境である。

東部山系

西藏の東部は地質的に近代において縁邊地域となつたところである。即ち東經九四度以東の地域で、山脈は漸次阿爾泰系の走向から東南に轉じ、一〇〇度に至るまでは全然南北の走向をとり、ブラマプトラ河をはじめ諸大河のコースもこれに隨つてゐる。地貌は全く高山地帯の特色を呈し、谷底は海拔二、五〇〇米内外で、耕地、聚落に乏しくないが、兩側の山は傾斜が甚だ急で、谷底から數千米も聳え氷河に蔽はれてゐる。但し山の下半部には鬱蒼たる森林を見る。

本地域の西部には、中部崑崙に並行して科科薩哩山脈及びその東に續く巴顏喀喇烏拉山脈があり、その南方に當拉山脈がある。中にも巴顏喀喇烏拉は黄河、揚子江の分水嶺をな

すもので、當拉山脈は揚子江とサルウイン河との分水嶺をなすものである。

北部西藏における阿爾泰系の山脈が漸次南に轉向して一の大山脈をなす、これが即ちインド支那山系である。この山脈は北方において高く南に至つて低く、漸次高原性となりインド支那半島に入る。

水系

本地域の水系は揚子江、サルウイン、メコンの上流に屬する揚子江の上流、即ち金沙江の源流は木魯烏蘇といひ、當拉山脈の北麓海拔四、八〇〇米の地點にあり、これより東北に流れランチュンルナ（拜都河）托克托乃烏藍木倫、那末齊烏藍木倫等の支流を入れ、これより金沙江と稱せらる。

瀾滄江はメコン河の上流である。その源流を匝楚といひ當拉山脈東北部の大雪山に發源し、東南に轉向して察木多（昌都）の南方で大支流鄂程楚を入れ江卡の西方から南流する。

怒江、サルウイン河の上流である源流を哈喇烏蘇またはナグチュといひ、當拉山脈の南斜

面に發し、正に金沙江の源流木魯烏蘇と南北相對する。これより金沙江、瀾滄江と並行して流れ、北緯二九度から二六度に至る邊では著しく右の二大河と接近する。河は雲南省では怒江と稱ばれ、ビルマに入つてサルウインとなる。

チャンタン高原

西藏の北部、中部、西部を占むる廣大な地域で、全部が内陸流域である。その南部には僅かに西藏族が住み、北部にはトルコ族獵者の出沒することあるも、大部分は無人の曠野である。

この地域は幾多の褶曲山脈から成る褶曲地帯で、山脈は原始層、古生層及び花崗石などから成るが、表面は盡く砂礫その他の風化生物に蔽はれ、山脈の間の谷に傾斜が緩慢で幅が廣く、これを横斷するに十數日もかゝる。山脈中の高峰には雪線を抜くものがあるけれども廣大な雪原はない。谷の平均高度は四、五〇〇米乃至五、〇〇〇米である。

チャンタンには數多の湖沼がある。それはみな東西に走る山脈間の谷を滿し、東西に並

列してゐる。湖水にステツブ湖沼の特性として一般に淺く湖水群をなす場合は、その最後の受水湖のみが鹹湖で他は淡水湖である。

南部の水系

ヒマラヤ、トランス・ヒマラヤ二大山系の間は世界最大の縦谷で、この谷を雅魯藏布が東はインダスが西に流れる。雅魯藏布は即ちブラマプトラ河の上流で、源は中部ヒマラヤの北麓マナサロワル湖に近いところにあり、東流して拉孜城附近にすれば兩岸次第に開けて耕地があり、これより彭錯嶺を経て日喀則に出る。この邊小舟を通じ海拔約三、九〇〇米、世界最高の内陸水路である。

これよりなほ東流して、拉薩の南を流れる曲水を合し東經九三度四〇分まで東流し、更に東北に折れ、東經九四度北緯三〇度の嘉刺辛東に出で急角度に東南に轉向し、ヒマラヤを横斷、アツサムのサドイヤに出る。サトレンジ河は支那人の所謂「岡喝河」で、源をヒマラヤの氷河に發し、一たび聖湖たるマナサロワル湖に入る。この湖は海拔四、五七五米、

その西隣に郎喝湖がある。兩者は地下流で接続し更に地下流となり、數軒下流の谷に豊富な泉となつて湧出し、狼楚河となる。この河は西北流して大峽谷を作り、ヒマラヤを横斷してインドに出でサトレンジ河となる。

氣 候

西藏には海拔平均四、〇〇〇米、日本の南半と略々同緯度にあるが、全年氣溫甚だ低く常に暴風吹き荒み、高原地帯で空氣稀薄であるから晝夜の氣溫激變し、夏の晝は拉薩で三五度にも達し炎熱やくが如くであるが、暴風吹き來れば忽ち雨雹、時には雪を降らし、夜は氣溫氷點下に下り、一日中の氣溫の差二〇數度に達することがある。十二月、一、二月の平均溫度は零下一四、五度、十一月から四月までは河湖共に氷結し、五、六月ごろに草が萌え出る。

又、周年概して西風が多く、毎年午前九時ごろからこの風が吹き、正午ごろから午後一時ごろにそれが旋風に變る。旋風の襲來は甚だ急激で、西方遙か地平線上に一抹の黒雲を

認めたと思ふ間もなく黒雲天を蔽ひ、風は砂塵を捲き、豪雨降雹これに伴つて来る。この旋風は、西風が近距離における気温の差によつて變化して起るのである。西風は印度の夏の季節風である南風がヒマラヤを越えて來たもので、大部分の濕氣はヒマラヤに奪はれるが夏はこれが南部、東部に雨を降らす。

交通

西藏の交通は地勢上極めて困難で、道路といつても山間の溪谷を辿る小徑に過ぎず、懸崖に臨む崎嶇たる山路が大部分である。

拉薩は交通の中心で各地よりの隊商路はこゝに集中する。拉薩西寧街道は一、八五〇軒、北支那、蒙古から拉薩に至る隊商路であるが、途中八〇〇軒は連続した無人の境で、兇暴な唐古特族が出沒するので現今では杜絶の状態である。

現在拉薩に至るには四川省成都より打箭爐、巴塘を経て行くもの、印度國境カリンボンよりするもの、雲南より北境阿墩を経て巴塘に至るもの、ビルマより騰越を経るもの等種

々なるが、普通成都より打箭爐を経るもの及び印度のカリンボンよりの二路が官道として最も認められてゐる。成都、拉薩間は五、九四〇支里行程七十八日を要し、印度カルカッタ、拉薩間は七〇七哩半(一、一三〇軒)で、その約半分は汽車の便による印度内地で、残り半分が西藏内地を乗馬によるもので普通二十一日間を要する。途中主なる峠はいづれも海拔三、〇〇〇米以上で、印度國境から西藏國境内に入れば海拔四、三六六米のゼレツブラといふ峻嶺が待構へてゐる。第二、第三の難關は唐拉及びカロラの二峠で、前者は四、六〇六米、後者は四、九三九米でいづれ劣らぬ峻峰であるが、高さの割合に通行は容易である。最後に、更に五、〇〇〇米のカンバラ峯、五、〇九〇米のニャブソラ峯のいづれかを突破せねばならぬ。

道は一般に峻嶮で傾斜屈曲甚しく、山間の隘路、斷崖が多く、大きな荷物を積んだ馬は辛ふじて通る程度で、車は如何に小さなものでも解體しなければ通らぬ場所がある。たゞ中間の帕里から江孜まで一五〇軒は割合に樂な路である。

この沿道の都會で大きなものは亞東、帕里、江孜。チユシウネタンまで國境から江孜まで約三二〇軒の道筋には、英印政府の建設したバンガローの宿舎があり、要地には郵便、電信、電話局まである。

この外ネパールの首府カトマンズから約一ヶ月、ブータンのプナカから十日内外で行ける道路があるが、これは不完全極まるものである。左は最近の調査による各地からの路程である。

(二) 成都より拉薩に至る路程

成都—雅安(三六〇支里二日行程、雙流、新津、邛狹、名山の四縣を通過す。成都新津間、新津邛狹間は完全なる道路あり馬車を通ず) 雅安—榮經(九〇支里一日行程、これより以西道路狹隘與による) 榮經—清溪(一一〇支里二日行程) 清溪—泥頭(八〇支里一日行程、泥頭は清溪の分縣である。これより以後羊腸たる山路となる) 泥頭—化林坪(七五支里一日行程、化林坪には此度鑪定

の分縣を設けた。西康省境である) 化林坪—鑪定(七五支里一日行程、此地は昔の鑪定橋で、四川より西康への抜道である) 鑪定—頭道水(七〇支里一日行程) 頭道水—康定(六〇支里一日行程) 康定は以前の打箭爐で川邊特別區域が西康省に改められてから康定と呼んでゐる。川康總指揮の政務委員會がこゝに置かれてある) 康定—折多(五〇支里一日行程、これより以西は馱馬による) 折多—安良(八五支里一日行程) 安良—東俄洛(五五支里一日行程) 東俄洛—臥龍石(七五支里一日行程) 臥龍石—雅江(二二〇支里二日行程、雅江は昔の河口で一名中渡ともいふ) 雅江—西俄洛(一三五支里二日行程) 西俄洛—火竹卡(一一〇支里一日行程) 火竹卡—理化(五〇支里一日行程、理化は昔の裏塘である。西康の要地で氣候寒冷) 理化—頭塘(五〇支里一日行程) 頭塘—喇嘛了(一〇五支里二日行程) 喇嘛了—三霸塘(一一〇支里二日行程) 三霸塘—大湖塘(二〇〇支里二日行程) 大湖塘—小巴冲(二三〇支里二日行程) 小巴冲—巴安(五〇支里一日行程、巴安は以前の巴塘である。城廓なく土地豊沃、氣候溫和) 巴安—竹巴籠(五〇支里一日行程) 竹巴籠—莽里(一三〇支里二日行程) 莽里—古樹(一二〇支里二日行程) 古樹—江卡(一〇〇支里二日行程) 江卡—黎樹(一一〇支里二日行程) 黎樹—石板溝(一一〇支里二日行程) 石板溝—阿足

塘(八〇支里一日行程) 阿足塘—洛加宗(二〇〇支里二日行程) 洛加宗—察雅(八〇支里一日行程) 察雅—昂地(九五支里一日行程) 昂地—王卡(九〇支里一日行程) 王卡—巴貢(五〇支里一日行程) 巴貢—包敦(二〇〇支里二日行程) 包敦—昌都(二五〇支里二日行程) 昌都—浪蕩溝(七五支里一日行程、昌都は昔の察木多である) 浪蕩溝—恩達(二六〇支里二日行程) 恩達—瓦合塘(二五〇支里二日行程) 瓦合塘—嘉裕橋(八〇支里一日行程) 嘉裕橋—洛隆宗(八〇支里一日行程) 洛隆宗—碩都(二六〇支里二日行程、碩都は昔の碩般多である) 碩都—巴里郎(二〇〇支里二日行程) 巴里郎—拉子(二〇〇支里二日行程) 拉子—丹達(二〇〇支里二日行程) 丹達—郎金溝(二〇〇支里二日行程) 郎金溝—阿蘭多(九五支里二日行程) 阿蘭多—多洞(八〇支里一日行程、多洞は別名を甲貢ともいふ) 多洞—嘉黎(二四〇支里二日行程、嘉黎は昔の拉里である) 嘉黎—山灣(二六〇支里二日行程) 山灣—寧多(二六〇支里二日行程) 寧多—大昭(八〇支里一日行程、大昭は昔の江達である) 大昭—鹿馬嶺(二六〇支里二日行程) 鹿馬嶺—烏蘇江(二八〇支里二日行程、途中堆達、竹貢を經過す) 烏蘇江—墨竹工卡(二三〇支里二日行程、墨竹工卡は西康省と西藏の境界である) 墨竹工卡—德慶(二二〇支里二日行程) 德慶—拉薩(六〇

支里一日行程、拉薩は前藏の首府、達賴喇嘛の駐する處である)

(三) 西藏より印度に至る路程

拉薩—宜黨(二九哩二日行程) 宜黨—曲西(三二哩二日行程) 曲西—札馬絨(二二哩一日行程、後藏の噶巴拉翻山麓を通過す) 札馬絨—北地(二五哩一日行程、北地は山間の小さな驛である) 北地—納噶則(二〇哩一日行程、相當大きな縣城である) 納噶則—雜拉(二二哩一日行程、此地は高山に圍まれ氣候爽涼、五月に降雪を見る) 雜拉—春堆(二五哩一日行程) 春堆—谷喜(二〇哩一日行程) 谷喜—江孜(二五哩一日行程、江孜は西藏における一大商埠で、英國の保衛軍が駐屯して居り銀行、郵便局、電報局があり、直接拉薩及びカルカッタと聯絡してゐる) 江孜—司馬達(一九哩一日行程) 司馬達—奪竟(一五哩、奪竟は大風で有名なところ、住居はあまり多くない) 奪竟—怕熱(二七哩一日行程、遙かに怕熱覺木慈仁山を望む、後藏における名山である。此の地は一名怕克里ともいふ) 怕熱—竹莫(二七哩二日行程、此の間崎嶇たる山路で行路極めて困難である。道路は嘗て修復されたがそれでも難行を極む。此の地は西藏の南部境界である) 竹莫—客若(二三哩一日

行程、ヒマラヤ山の麓で客若には印度、西藏の旅館が數戸ある。客若―則路(二〇哩一日行程、山上印度の旅館が數戸あり) 則路―春邛(二三哩一日行程、ヒマラヤの高原地帯に屬し、旅館のあること前二地と同様である) 春邛―北洞(一二哩一日行程、途中ツォンタバには多數印度の商店がある) 北洞―カリンボン(二三哩半一日行程、この地は印度、西藏間の著名なる商埠で商店多數あり) カリンボン―カルカッタ(三五九哩一晝夜行程、カリンボンより自動車にてチャシチャに至り、同地より汽車にてシリグりに至り、こゝで急行車に乗換へカルカッタに至る)

(四) 雲南より西康、西藏に至る路程

(一) 雲南省城より阿墩を経て巴塘(巴安)に至るもの
 雲南―楚雄(四四〇支里六日行程、省城より禄豊まで自動車を通ず。「それより以西も既に道路建築を了り、下關まで通車を見る筈である」) 下關―大理(三〇支里半日行程) 大理―麗江(四〇〇支里五日行程) 麗江―維西(四五〇支里六日行程) 維西―葉枝(二五〇支里三日程) 葉枝―阿墩子(四〇〇支里五日行程) 阿墩子―鹽井(三三〇支里鹽井は西康省に屬す) 鹽井―巴塘(三七〇

支里六日行程) 以上三、二〇〇支里四十二日行程

(二) 麗江より德榮を経て巴塘に至るもの

麗江―中甸(三五〇支里五日行程) 中甸―東哇絨(三四〇支里五日行程) 東哇絨―德榮(四五〇支里六日行程) 德榮―巴塘(三五〇支里五日行程) 以上一、四九〇支里二十一日行程

(三) 麗江より木裏を経て康定(打箭爐)に至るもの

麗江―永寧(四〇〇支里五日行程) 永寧―木裏(四二〇支里六日行程) 木裏―康定(二〇〇支里十五日行程) 以上一、九二〇支里二十六日行程

(四) 阿墩子より江卡を経て昌都に至るもの

阿墩―江卡(五〇〇支里五日行程) 江卡―扎鴉(六〇〇支里八日行程) 扎鴉―昌都(四五〇支里六日行程) 以上一、五五〇支里二十一日行程

(五) 阿墩より擦哇絨を経て拉薩に至るもの

阿墩―擦哇絨(五五〇支里十日行程) 擦哇絨―扎雀卡(六五〇支里十二日行程) 扎雀卡―拉薩(二、一〇〇支里二十日行程) 以上二、三〇〇支里四十二日行程

(六) 下關より緬甸を経て拉薩に至るもの

下關—永昌(五〇〇支里五日行程) 永昌—騰越(三〇〇支里四日行程) 騰越—八募(六五〇支里八日行程、途中麻草地と八募の間は自動車を通ず。二時間) 八募—瓦城(汽船にて三日行程)
 瓦城—蘭貢(汽車にて十八時間) 蘭貢—カルカッタ(汽船にて三晝夜) カルカッタ—カリン
 プン(汽車にて三十時間) カリン—江孜(五五〇支里九日行程) 江孜—拉薩(四八〇支里八日行程) 以上計四十四日行程

(五) 物産及び商工業

西藏の物産は餘り豊富でない。鑛産では金、銀、銅、錫の類があるといはれ、畜産として犏牛、馬、駱駝等がある。農産では青稞が最も多い。青稞といふのは麥の類で、これを晒粉にして餅を作り、牛羊の乳を交へて食する。鑛産では金が最も多く、西部及び東部地方の河流中には沙金も發見される。

この外、鹽並に礬砂が出る。鹽は沼鹽が最も名高い。畜産では犏牛が最も有名である。

その他羊、大黃、麝香等を産する。

西藏の工業は、銅佛、藏香、木椀が有名である。銅佛は小さければ小さい程高價である。藏香は各種の香木から製せらる。木椀は札木札牙及び拉庫爾木の兩種がある。薄黄色でよく毒を避くるといはれる。清時代には、これを貢物としたものだ。一般工業は毛織物が多い。

商取引は對支、對印の二つに分たれる。西藏から支那に輸出されるものは羊毛、麝香、大黃、鹿茸、皮革を主なるものとする。輸入品は磚茶が主である。茶の西藏における消費額は一千一百乃至一千三百ポンドといはれ、これに次いで、棉花が相當遣入る。

對印貿易は二部に分れ、その一はベンガルに對するもので家畜を主とし、毎年三、四萬頭に達す。その次は鹽で、年額二千二百乃至三千噸に上る。羊毛はこれに次ぎ、二千噸に達する。輸入品は綿織物、毛織物、金屬器皿などが主である。

その二はカシミア、ブンジャブ及び聯合省に對する貿易で、羊毛、麝香、礬砂を主なる

輸出品とし、礪砂の毎年輸出額は一千噸に達し、毛織物、綿織物、綠茶、砂糖を主なるものとする。

第二節 「神々の都市」拉薩

金色に燦然たる殿堂、透徹せる青空、翠綠滴らんとする牧場、溪谷に實る青稞、千古の雪を頂くヒマラヤの峻峰、その間を悠々と飛翔する鴛、黑鷲の暴威、怪奇なる喇嘛、善男善女の群、およそ之が秘境西藏のあらはな姿であらう。

世界の屋根——バミール高原、ヒマラヤ連峯を背景に秘密國——西藏は、千古の謎を潜めて黙々たる姿を横たへて居る。西藏民族を研究するには宗教を知らなければならぬ。西藏の宗教は喇嘛教である。

西藏の人口の三〇パーセントは喇嘛僧で、その七〇パーセントは新教派、世に黄教と云ふもの、二〇パーセントは舊教派、俗に紅教と稱するもの、残る一〇パーセントが黒教で

あるが、その勢力は殆んどない。西藏は到る所に喇嘛寺が散在し、喇嘛僧は全境域に充滿して居る觀がある。

(一) 活佛

喇嘛僧の首長は「達賴喇嘛」と「班禪喇嘛」の二人の大教職である。この教職は神聖・無垢・不死・全知・全能の法位であつて、喇嘛教徒自ら云ふところの、地上に於ける活佛である。達賴喇嘛は「觀世音菩薩」の權化、班禪喇嘛は「阿彌陀佛」の權化と云はれる。故に阿彌陀佛は觀世音菩薩の靈父であるから、班禪は達賴の上座となる譯であるが、事實は全く反對に、達賴は班禪に比して非常なる尊嚴と意義とを有して居る。それは第一に、達賴は西藏に於て廣大なる領地を有し、従つて強大な政權を握つて居る。第二には、達賴は西藏の護國神である觀世音菩薩の化身で、西藏國に最も密接な關係を有し、西藏の教化者、教法の宣傳者、國長の守護者と信ぜられる故である。達賴は拉薩と布達拉山は、班禪

は札什倫布にその居館を有して居る。

(二) 拉 薩

諸神の諸市——諸神の地と云はれる拉薩は、南北四十里（支那里程）東西四百里乃至五百里に亘る、西藏でも稀に見る豊穰な平原にある。市街のある狹隘なる平地は、四方山丘で囲まれ、ザンチ河がその間に注いで居る。同河は西藏中の大河である雅魯藏布河に合して居る。

拉薩市街の家屋は概ね白壁で、殿堂伽藍の屋上には黄金の寶珠狀圓蓋が燦然として輝いて居る。市街を圍繞する林の如き老樹は、白堊金光と相應じて一大美觀を呈し、敬虔な参拜の巡禮をして愈々その信心渴仰の感を深からしめて居る。併し市街は左まで大きい譯ではなく、僅かに二時間足らずで廻る事が出来る。人口は四萬乃至八萬と云はれて居るが精確な數字は判らない。市内の比較的清潔なのにくらべて、廓外の町は不潔も甚だしい。家

屋は大概石造か煉瓦造りで、稀れには牛や羊の角を材料にセメントのやうな物で築いたものもある。

拉薩の建物の中で、最も壯嚴、美觀を極めて居るのは寺院の建物である。市街の中央には、老木朗、即ち「拉薩の獻祭堂」と云はれる大寺院がある。老木朗大廟は拉薩の中心であるばかりでなく、全地方の中心と稱せられる。それは、西藏を通る道路が悉くこの寺院を發途點として居るが爲めである。又老木朗は喇嘛教の中心である。同時に喇嘛諸教寺院中の最古の寺院で、特勅德隆贊王によつて「暗黒なる雪國」が始めて佛教の光明に照された十世紀の開山建立である爲めである。同王がこの寺院を建立した縁起は、二人の王妃（二人は唐の太宗の王女「文成公」他の一人は尼波羅の王女「ブリスブス」が、各々その本國より將來せる靈驗新たなる釋迦の尊像を安置する爲めに之を創營したとの事である。（此の像は西藏で「ジュー」と稱す）

この創始の寺院が千年の經過する間に次第に擴張され、十七世紀になつて更に復舊、改

築された。

老木朗大廟は、大寺院であるばかりでなく、政治の中心地である。攝政官（ノミハン）の居館であり、西藏大臣その他の高官の會議、裁判等は、何れも此處に開かれ、一切の重要事件を達賴喇嘛並に支那代表の西藏大臣に申達する前に、何れも此處で審議せられるのである。獄舎はこれより遠からざる地にあり、又支那の政務官衙だけは、此の寺院外の拉薩の主要街にある。この大寺院内の庫裏に銅の大釜があつて、この釜で毎日寺院に勤行する喇嘛のために茶を煎沸するのに百荷の水を要する所から見ても、如何に多くの喇嘛僧がこの寺院内に居住して居るか云ふ事が判る。

老木朗大廟の北方に喇木契寺がある。この寺院に居住する喇嘛は何れも禪僧で、常に己れの感覺を抑制し、その心念の意慾を斷する修業を爲して居る。その一方法として、人情風俗の生活を描いた繪によつて、その罪を斷滅する事に精進、努力する。この寺院にはその爲めに、男女性交の状を模した三十種の模型を藏し、喇嘛は斯くの如きものを見ても尙

且つ其の心を動かさざるやうに、精神上の鍛鍊をなすのである。

(三) 布達拉山

拉薩市の西北方に直立七十丈餘の山丘「布達拉山」(普陀洛迦ともいふ)がある。山頂は三峯をなし其の山麓にザンチ河が還流して居る。三峯中の西南の峯を「鐵嶺」東北の峯を「羊嶺」中間の最も高い峯を「紅嶺」といふ。この中央の「紅嶺」には、その昔國王の城塞「ラトトリ王」と「特勒德隆贊王」の居城があつた。この城塞の廢頽して居たのを第五世達賴喇嘛「阿旺羅卜藏嘉木磋」(Nagwan Lonzan)が之を復舊し、その周圍に寺院堂塔を増築して一大寺院となし、從來の居館「黄金寺」(或はブレング寺)の代りに其の居館を此處に定めたのである。爾來この寺院と全山丘とを總稱して「布達拉」即ち「佛山」と呼ぶに至つた(布達拉寺は大召寺ともいふ)。達賴喇嘛の居館は、その家屋の色彩から名附けて又「紅館」とも云ふ。

布達拉寺の殿堂伽藍の結構、壯麗さは實に東洋無比と云はれ、居館なる大寺院は四層の大厦で、三百六十七尺（支那尺）の高さを有し、家屋の頂上は圓蓋で、悉く金色の瓦を以て葺き、内部には善美を極めた柱廊があり、その巨柱も悉く金色である。「化身の聖者」である達賴喇嘛は、この高樓の上から、山麓に群集して膝を屈めてこの山上を崇拜する數多の歸依者を瞰視する。この大寺院の附近に在る建物は、喇嘛を居住せしめる爲めに一萬室の僧房がある。

布達拉より半時間の行程を隔てた地に「カ・ヂ・ラ・ワ」と名づける名苑がある。苑内には潑刺たる魚の游躍する淨池があり樹木鬱蒼たる並木路があり、百花馥郁、苑を逍遙する旅人をしてその身の雪國に在るを忘れしめる。これは、達賴喇嘛の夏時の別荘である。

拉薩は世界中で巡禮詣拜者の最も多く來集する地方の一つに數へられやう。年來、一日として巡禮の絶えた日とて無く、市中は之等の群集で雜踏して居る。各地各國に居る西藏人、ブータン人、その他ヒマラヤ種族・東西内外蒙古人・黄河より貝加爾まで、滿洲の極

北より伊犂までの諸民族は悉くこの地に集り、何れも佛陀の生ける代理者に祈願し、其の清めを受け、罪を滅し、幸福なる往生を得んがために來るのである。彼等巡禮は金銀若くは多くの家畜を以て、護符、靈藥、達賴喇嘛の掌印、聖大喇嘛の舍利その他の寶物と交換するために來集する。

(四) 大悲山

喇嘛教の第二の大本山である。班禪喇嘛の居館は拉薩の西南三十哩の地に在り、これを「札什倫布」といふ。即ち「大悲山」で一名又ラブラングともいふ。札什倫布市の廣さは拉薩に次ぎ、班禪の居館、役僧の居住、寺院塔堂を合して戸數三百乃至四百と云はれ、同地に居住する眞の資格を有する喇嘛だけで、約三千七百餘人と算せられる。

(五) 喇嘛僧

喇嘛教國の常として活佛は主權者である上に、經典は佛教の夫れとは異り、所謂學問の總てを網羅して居り、數學、地理、歴史、物理、化學、倫理、天文、易學、醫學、教育、甚だしきは房事に關する事柄まで含まれて居るから、喇嘛は僧侶であり、學者であり、物識りであつて、冠婚葬祭その他凡ゆる仕事を掌つて居る。

達賴が親英派で、班禪が親支派であると云つても、事實は彼等を支持する僧正の力が西藏の眞の勢力で、二人の活佛は傀儡に過ぎない。活佛の背後にある僧正等の政策は、たゞ喇嘛政權の勢力維持に一貫してゐる。そして英露支三國の間を泳ぎ廻つて、自國の獨立と安全を計る爲めに轉々として來た。

一九三三年十二月、十三世達賴喇嘛は、大西藏國建設の雄圖空しく謎の死を遂げ、西藏は支配者を失つた。斯くて一九二四年西藏政變の結果追放された班禪喇嘛が、十年の幽居生活をかなぐりすて、脚光を浴びて登場して來た。班禪の入藏問題がそれだ。その背後に糸を操る國民政府、西藏の心臓部深く喰込んで居る英國、何れ劣らぬ利け者揃ひ、果して

どんな芝居を打つであらうか。國民政府の一石二鳥の苦肉策、狼狽なる英の觸手、興味ある班禪の入藏問題はどうか展開する？

第三節 今後の西藏問題

(一) 達賴死後の内紛

一九一一年、第十三世達賴喇嘛が印度から西藏に歸り、重ねて政權を握つて以來、支那と西藏の關係はとかく圓滿を缺いた。それは達賴が、豫て英國と結んでその實力を養ひ、支那の羈絆から脱しジョン・ブルの旗の下に、大西藏王國の建設を企圖したからであつた。この遠大なる野望の下に達賴は一九二四年、先づその反對派である班禪喇嘛を北平に追放することに成功し、次いで國民政府に對して獨立を宣言した。適々一九三〇年から大金寺事件發生し、二千の西藏軍は英國の援助の下に西康の進撃を開始するに至り、康、藏の紛糾はこれを導火線として展開された。

その達頼が一九三三年十二月十七日、忽然として圓寂した。

達頼の死は、彼を傀儡として大西藏國建設を企圖してゐた英國にとつて少なからぬ打撃であつたに違ひない。が、これと反對に喜んだのは支那側である。支那側では、達頼の死を以て西藏問題解決の好機會だとした。うまく處置すれば喪はれた西藏の統治權を恢復し邊疆の領土を鞏固にすることは敢て困難でないと思へた。これについて支那側が最も問題としたのは、宗教によつて團結してゐる西藏人民を如何にして懐柔するかであつた。つまり、この宗教關係を餘程うまく處理しなければ、却つて毛を吹いて疵を求むるやうなことになるぬとも限らぬからである。

傳へらるゝところによると第十三世達頼喇嘛は、その所屬系統中の最後の一世で、圓寂後再び轉生しないといはれてゐる。かの西藏の宗教改革者であり黃教喇嘛の開祖である宗喀巴の大弟子根敦珠巴から今日まで十三世を傳へ、その數はこれを以て滿限することゝなつてゐるので、今後の繼承問題は從來のやうに簡單には行きかねるのである。

これについて現に拉薩方面では、已に第十四世達頼の人選を決定したと傳へられるが、事は極秘に附せられ、何處まで信を措いてよいかわからない。達頼の轉生については、清末には金奔巴瓶の制度があつた。これは活佛の轉生者であると認められたものが數人ある時、その各々の名を記した御籤を黄金の瓶の中に納め、經文を誦じて神の降臨を請ひ、支那の駐藏大臣が臨席してその中の最も支那側に有利と認むるものを入選して、眞正なる達頼の轉生者と決定したものである。併し清末に行はれたこの奇術式の選定法は、民國に入つてから廢止されてしまつてゐる。従つて轉生者の確認が如何なる方法によるかは、甚だむづかしい問題となつた譯だ。

また、たゞ第十四世の達頼が已に生れ出で當選の資格が決定したとしても、西藏の制度によると、この轉生者が成人して二十歳に達せねば正式に教主の職に就くことは出来ないことになつてゐる。即ち現在の轉生者が正式教主に就くまでの二十年の過渡期間は、どうしても何人かの攝政によらねばならない。こんな譯で、昨冬達頼の死後、西藏の政務は

すべて藏王の「司倫」である堯杞冷清が代攝してゐる。彼は達頼の從弟にあたり今年二十七歳の青年であるが、その爲人精明强悍、なか／＼のやり手で、且つその思想的傾向も達頼と彷彿たるものがあるといはれる。

かうした男であるから、支那側に對して好感を有して居らぬは勿論、達頼の流れを掬んで親英的傾向が極めて濃厚だ。

ところが一九三四年二月末になつてから 西藏の僧俗官民は突如として結澤熱振呼圖克圖を公舉して、西藏政務を代攝せしむる旨を發表した。即ち現在の情勢においても、達頼死後における西藏の政務には達頼派たる堯杞冷清と僧民公舉による熱振呼圖克圖の二つの代攝者が對立して居り、互にその権力を争つて居るやうに見ゆる。

(二) 班禪歸藏問題

結澤熱振が如何なる人物であるかは今のところ充分知られてゐないが、達頼派であつた

これまでの攝政政府の軍事將領は多く英國留學生で、一般政務を執掌する少壯派は頗る親英的色彩が濃厚であつた。その領袖である倫夏將軍は親英派の總帥として隠然たる勢力を有してゐたが、その後傳へられたところによると本年五月、彼等の陰謀が暴露し倫夏は斬罪に處せられたとの説あり、「司倫」派と熱振派の暗闘は已に表面化したものと見られる。

更に西藏政局の内情を盡すためには、西藏政府内における三大派の存在を知らねばならぬ。即ちその一は達頼派、その二は班禪派、その三は中立派である、右の中、中立派は権力なき僧俗が中心となつてゐるもので、これが態度は大して注目し値ひしない。

達頼派の下には更に保守系と親英系がある。保守派は一旗幟を樹立してはゐるが、あまり積極的活動はしない。親英系は倫夏が殺害されて以來、一時沈黙状態を續けてゐる。

班禪派は専ら親支傾向を辿つて居り、前藏の哲邦(德賚綱)、色拉、甘丹(噶爾丹)三大寺の親支派とも密接な聯繫がある。本年春間、この三大寺の代表は南京に赴き中央政府に對して、

(一) 班禪を歸藏せしむること

(二) 群小を驅除して西藏の政治を改良せしむること等五項よりなる請願を呈示した。この三大寺の政教勢力については、嘗て一九三一年、達賴が大舉して青海、西康を進攻して失敗し、全西藏に徵兵令を下して再舉を圖らんとした際、右三大寺は敢然としてこれに反対し、達賴は一時拉薩出奔の已むなきに至つたことがある。その後達賴は遂に屈服し主戦派を驅逐したことにより漸く信用を恢復して結末を見た等のいきさつもあり、三大寺の西藏政權に對する勢力はなかく悔りがたいものがある。

かうした情勢の下、今日班禪を擁して入藏せしむることは、西藏の統治權を恢復する上に支那側としては最も適切なる方便であらう。即ち喇嘛の教義に従へば、達賴と班禪とは易世相互に師たることゝなつてゐるので、たとひ第十四世紀達賴が決定したとしても、班禪が入藏するにおいては當然師傳たるの位置に据ゑられねばならぬ。政權は「司倫」或は結澤熱振の手に握られても、教權はむろん班禪に屬せなければならぬ。而も西藏の宗教勢

力は政治をも支配するものである以上、三大寺の後援によつて歸藏する班禪の立場は、相當有利に展開すると見ても差支へはあるまい。

班禪は一九三四年已に上海から北平に至り、八月十一日綏遠に向つて出發した。同地は一ヶ月程滞在した後一旦青海に赴き、秋に入つてから入藏するといふことであつたが、一年を経た今日、なほ青海に滞留したまゝとなつてゐる。

班禪は出發前北平において語つてゐる。

『余は北平に數日滞在し平綏鐵道の交通恢復をまち、内蒙の伊克熱盟に赴き、同地に二ヶ月滞在した上青海に赴き、秋涼後、西藏に歸る豫定である。余は南京滞在中、中央當局と西藏の件につき詳細な計畫を打合せた。歸藏後は逐次これを實行するつもりである。歸藏の目的は中央の德威を宣達し、内外民族の間を疏通して合作をはかり、國防を固くするにある。』

これより先、南京政府は達賴の祭祀專使として參謀次長黃慕松を西藏に派遣し、黄は數

ヶ月を要して拉薩に入り、西藏人の班禪歸藏に對する意向をたしかめ、同時に班禪の入藏前における各方面への政治工作を行つた。

班禪の歸藏問題について、汪兆銘は嘗て左の如く發表した。

『班禪の歸藏問題については、英國は已に西藏侵略の意圖なきことを表示してゐるから、この點については問題はない。たゞ西藏僧民が班禪の歸藏を歓迎するか否かは黃慕松の派遣により西藏側の眞意が判明するであらうから、若し眞に歓迎するといふならば、中央としては充分これを援助するつもりである。併し中央としては、武力を以てまで班禪を護送する意思はない』と。これは班禪も同意見である。

西藏問題は支那にとつて實に二十年來の懸案である。而もその内容は錯綜複雑を極め、容易につきとめることは出来ない。

今回達頼の死を以て西藏問題解決の好機會だとした南京政府は、以上の如く先づ瀨踏みとして黃慕松を西藏に派遣し、その報告を俟つて、工作の可能性あらば直ちに班禪を歸藏

せしむることゝしてゐるが、この外西藏問題について屢々討論を闘はした結果、今後の對策として、

- (一) 西藏の外交、國防及び國際通商等の大權は中國政府においてこれを保留す。
- (二) その他の政教問題は西藏政府において任意處理せしむ。
- (三) 清末嘗て兵を西藏に派して失敗した經驗に鑒み、駐藏長官辦事處を恢復することにし特に兵を派遣せず。
- (四) 拉薩に通ずる成都、青海よりの交通を完全にす。

等の要領を決定してゐる。但し支那政府の對西藏工作は表面西藏僧民に對する工作には違ひないけれど、それは同時に英國の西藏政策に對する工作で、その間樽俎折衝は相當に骨が折れることを覺悟してかゝらねばなるまい。

西藏境域の郵便、電信、林鑛、金融、交通、軍事、警察等はすべて英人の操縦に委ねられてゐる現狀である。かのヤングハズバンドの遠征以來、三十餘年に亘つて培はれた英國の西藏における勢力は、支那側が考へてゐるやうにさう易々と支那側に回收さるべきもの

ではあるまい。班禪に對する歡迎の聲と同時に、これに對する反對の聲があることも豫期しなければならず、特にかの倫夏將軍被殺後の親英派の不氣味なる沈黙は、支那側並に班禪派にとつては、爆彈を抱くにも似た無言の脅威である。即ち班禪の歸藏と共に、今後における西藏問題は相當興味ある展開が豫想される。

第四節 喇嘛教

(一) 喇嘛教の類別

喇嘛教は西藏特有の佛教である。多神教たる印度教の形式に依り、花を以て覆ひ、寶石を以てこれを飾つたものである。従前は紅教が西藏境域において絶大の勢力を有したが、後に幽鬼の魔法を行ふて衆を迷はすに至つたので、「宗喀巴」が現はれて宗義改革を叫び、紅衣派を排斥して黄教を創立した。黄教が興つてから勢力大に振ひこの宗派は西藏及び蒙古の全境に普遍して、今日では西藏蒙古における喇嘛教の中心をなしてゐる。即ち西藏蒙

古における喇嘛教中、黄教の勢力は約七割を占めて居り、紅教は二割位にしか過ぎない。この外黒教といふのがあり、西藏の撤加都城地方に行はれてゐるが、その勢力は極めて微々たるものである。

(二) 喇嘛の産生

西藏及び蒙古には到るところ喇嘛を以て充滿してゐる。彼等西藏人及び蒙古人の喇嘛教に對する信仰は極めて深く、庶民の家庭において三子あるものは、少くともその中一人を喇嘛寺に入れ經文を學習せしむる。この種喇嘛寺の小喇嘛はその家庭と依然關係あるもので、喇嘛寺で五年間教義を學習して歸つて来る。この外に全然出家してしまふものもある。これは當初から喇嘛で一生を終へることを念願としたもので、家庭とは全然絶縁して佛に歸依するものである。これは西藏及び蒙古における普通の現象である。

(三) 各級寺院の組織

西藏の喇嘛は全人口の三〇%を占めて居り、大小の喇嘛寺は全境到るところに散在してゐる。これらの寺院は形式上獨立の組織となつてゐるが、實質上互に關聯し系統的となつてゐる。その形式は喇嘛廟十個所を以て小喇嘛寺を組成して居り、この小喇嘛寺は村鎮等の小部落を中心としてゐる。同様に小喇嘛寺五個所を以て大喇嘛寺を組成して居り、それら大喇嘛寺は各城市を以て中心としてゐる。この大喇嘛寺の上に更に最高の寺院がある。即ち前藏の噶登寺、色拉寺、西徳寺等の大組織、後藏の札什倫布寺がそれである。

(四) 達賴と班禪

達賴、班禪及び外蒙の哲布尊丹巴は喇嘛教の三聖である。この三人はいづれも「宗喀巴」の門弟である（宗喀巴の後裔には達賴、班禪、哲布尊丹巴の外になほ阿嘉呼圖克圖といふのがあつた

が北平で歿した）。達賴の名を「見草」といひ、班禪の名を「克主」といふ。この兩人は繼續轉生するもので、不斷の生命を有してゐる。

達賴は蒙古語で、「大海」の義である。故に「大海喇嘛」ともいふ。又班禪は「班禪爾德尼」或は（バンチエンリンボチ）といふ「大尊者」「大寶師」の義である。班禪喇嘛は又「デシヨ・ラマ」「ボグド・ラマ」「ボグド・ゲゲン」等の稱がある。この兩喇嘛は共にその身體を解脱する時は、何時も必ずその同一の地位を得るために再生するのである。

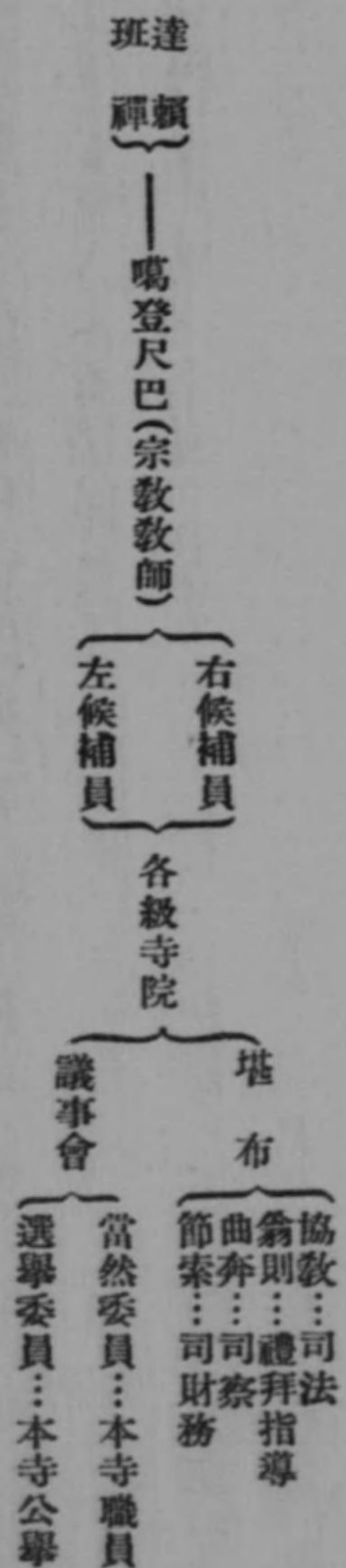
明の成化十五年、宗喀巴の死後この兩人に命じて前藏、後藏を分別統治せしめ、黄教を力倡してこれが教主とした。かくて達賴は今日まで十三世を傳へ、班禪は七世を傳へてゐる。第十三世達賴は一九三三年十二月十七日拉薩に圓寂したので、その政教權は上叙の如く現在結澤熱振呼圖克圖が代理してゐる。

(五) 喇嘛の参政

支那中央政府では達頼を法王兼政治首領とする外、前藏、後藏における四大寺中から毎年十數名の喇嘛を推薦して政治に參與せしめてゐる。地方においては、各喇嘛寺の中から才能ある喇嘛を選出して前藏政府で試験を行ひ、これに合格すれば地方行政長官として採用してゐる。而してこの地方行政長官にして特殊の成績を挙げたるものは、四大臣の一員とすることにしてゐる。

(六) 喇嘛の行政系統

喇嘛の行政系統を表示すれば左の如くである。



(七) 喇嘛寺の財政

喇嘛寺の財政は宏大なる建築物の外、大量の土地と家畜である。更に貸地よりする收税及び家畜の賣上代は喇嘛寺經濟の基礎をなすものである。動産では(一)喇嘛寺における公款を商人に貸與しこれよりする利息(二)喇嘛寺所有田地の賃貸收入(三)讀經の布施(四)大地主商人、貴族などの寄附等、以上はすべて收入であるが、支出としては、(一)喇嘛の生活費(二)各寺院の經常費、職員の俸給(三)慈善事業及び歳末救済の施我鬼等である。

(八) 喇嘛寺の防衛と武力

西藏及び蒙古における人民は喇嘛に對して異常の信仰を拂つて居り、家庭親族中、喇嘛であるものが大多數を占めてゐる關係から、喇嘛寺の命令とあらば如何なることでも服従するを常とする。同時に喇嘛は、その範圍内の僧俗、人民及び生命財産を保護する見地か

らそれ／＼防衛の方法を講じて居り、大喇嘛寺中には數千挺の小銃を藏有してゐるところもある。即ち一朝有事の際は、彼等喇嘛は念珠を抛ち武器を執つて起つだけの準備をしてゐる。先年來の西康、甘孜、大金寺等の兵亂が康藏間の危機を醸成した如き、その一例である。

(九) 喇嘛の教育

凡そ兒童の喇嘛寺に入つて喇嘛教の洗禮を受けた後、經文の學習に従ひ五年の訓練を経て相當の根柢が出来れば、更に一步を進めて前藏、或は後藏の各大寺に入り、一層深い研究を遂ぐる事になつてゐる。又喇嘛の教育方法はなかく／＼厳しく、學習者が教師の指揮に違つたりすると條鞭を以て苛責を加ふるなど、極めて峻嚴であるといはれる。

(一〇) 喇嘛寺の建築

喇嘛寺は非常に多數の喇嘛僧を收容せねばならぬ關係から、その建築も特種の研究が施されてゐる。寺院はいづれも□形をなし、經堂がその中に在つて喇嘛の朝夕讀經の處とされ、經堂の左右は喇嘛の宿舍にあてられ、上下二層となつて大小喇嘛の經文學習の場所となつてゐる。每一室に若干人の喇嘛が住居し、その中の設備は普通人の居宅と同様である。寺内には廣大なる井戸があり、美麗なる花園がある。又喇嘛の飲食は、各自炊主義によつてゐるので別段大きな厨房といふものはなく、宿舍の各室に小さな竈が設けられ、鍋釜などが置かれてある。又喇嘛寺のある場所は大概山側で、その様式は宮殿を模倣し莊嚴華麗を極めてゐる。

(一一) 服 装

黄教派喇嘛の服装はその宗規に基いた暗淡黄色の衣服で、暗赤色の不潔なる下衣の上に相當なる帯にて結束し、その上に刺繡せる外袍を着けてゐる。そしてこの帯から革製の屨

筆筒及び巾着等を吊り下げてゐる。長靴は、犀牛の毛皮を以て底とした硬い赤色の獸皮よりなり、その長さ殆んど膝に達する。下着及び外袍は僧侶たることを示し、帽子はその形によつて宗派の如何を示してゐる。特別の色、殊に紅、黄は日常生活のすべてに及ぼしてゐる。紅帽は紅教派で赤色の條文を現はしたる家屋内に生活し、赤い念珠を用ゐ、赤色蓮花を愛する。これに反して黄教派は黄色の帽子を被り、萬事その特有の黄色を用ゐて紅教派と對峙してゐる。

第五章 四川を目指す英勢力

(一) ヒマラヤを越えて

外蒙と新疆がロシアのものであるやうに、西藏は英國のものである——さう折紙をつけても大體間違ひはあるまい。一九〇四年、かのヤングハズバンド大佐の西藏遠征以來培はれたイギリスの西藏における勢力は、最早今日では、牢として抜くべからざるものになつてゐる。

印度國境のカリンボンから西藏の首府拉薩まで三三三哩半、ヒマラヤの高原、その間、海拔四千米から五千米の峻峯がそゝり立つて、途こそ險阻ではあるが、國境から江孜まで約二百哩の沿道には英印政府の建設したバンガローの宿舎があり、要地には郵便、電信、電話局まである。江孜にはイギリスの保衛軍が駐屯してをり、もう立派なイギリスの植民地と化してゐる。

かうして西藏境域の郵便、電信、林鑛、金融、交通、軍事、警察は總て英人の手に委ねられ、西藏の軍政權を握る司倫(官名)はたゞイギリスの領使によつて動くといふ現状である。尤も西藏には哲邦、色拉、甘丹といふ政治的にも極めて勢力を有する三大寺があり、これが親支派で班禪喇嘛の系を引き、一九三三年、親英派の第十三世達賴が死んでから班禪を迎へて達賴派の勢力、つまり親英派を壓へようといろんな策動をやつてはゐるが、班禪の西藏入りも今なほ實現せず、果して歸還出来るか否かも疑問とされる状態で、達賴死しても親英派の勢力は容易に動かされさうになく、一方支那側の主權恢復運動にしたところが黃慕松の入藏歸來後、一向何等の發展を見ないやうで、西藏は今後共依然英國の支配下に推移すると見て差支へない。

(二) 大西藏國の建設

イギリスが西藏に進出したのはその印度を保つたためである。つまり西藏を以て印度北

境の緩衝地帯とするためであつた。ところが西藏を略取して見ると更にその北方に覗きかかるソ聯の勢力が氣にかゝり、同時に中國共產軍の勢力が發展するのを見てはその長江流域における權益の危険を感じ始めた。新疆におけるソ聯勢力の擴張は忽ち西藏、印度における權益の恐慌を來す。又ソ聯の新疆より長江に至る國際路線が打立てらるれば、イギリスは支那西部の勢力をこれによつて遮斷さるゝのみならず、支那に有する凡ゆる權益を根こそぎにされる危険がある。これがつまりその「大西藏國」建設を企圖するに至つた直接の原因である。

所謂「大西藏國」といふのは單なる西藏領域のみを指すのでなく、即ち西藏を中心として北は新疆南部——普通に南疆或は支那トルキスタンと呼ばれるカシユガル一帯——青海西康、四川西部、西北雲南の一部を連ねる廣大なる領域に亘るもので、支那の西半部の領土を包括するものである。この「大西藏國」建設のためにイギリスは、

一、その第一着手として急速に印藏鐵道(已に甘孜まで起工されてゐる)を築造して西

藏におけるイギリスの勢力を固むることにつとめ、

- 二、新疆開發のための印新大鐵道の布設を計畫し、
- 三、西藏軍を煽動して西康、四川、青海に進攻しその勢力擴張につとめ、
- 四、最近又キルギト（新疆の西南境）附近に英軍の駐屯地を設け軍事の指揮にあてるところになつた。

西藏軍の川康進撃は、一九三〇年のいはゆる西康大金寺事件を發端として展開したもので、西藏軍約二千五百、民兵一千四百がイギリスの支援の下に川康へ進撃し四川軍と兵火を交へたもので、交戦年餘に及んだが敗れて一旦金沙江西岸に退却、その後達頼の決戦命令によつて再び逆襲に轉じて來たが、一九三三年達頼の死と共に西藏軍は原防地に引揚げたので終熄した。この戦亂はいふまでもなくイギリスが、機を見て西康、四川、青海へ進出しその勢力の擴張に資せんとしたもので、いはゆる「大西藏國」建設の根本方針に基いたものである。

キルギトにおける駐防軍新設については、種々取沙汰されてゐるが、英國は「大西藏國」の實現を期する一方、更に印度、アフガンの回教徒を利用して煽動して變亂を起さしめ、新疆と支那を離間し、印度、波斯、アフガン等の回教國を聯合して一大回教國を建設せんとする意圖もあり、即ち、この新回教國の首都としてキルギトを選定したとの消息もある。

(三) 新疆、西康への進出

「大西藏國」實現のための英國の侵略政策は、川康、青海方面への進撃と同時に南新疆へ向つても發展した。喀什噶爾の英國領事館を總本部として南新疆各地の都市にその勢力を扶殖し、一方英印商人を指導して貿易計劃を樹て、積極的發展策を講じて北新疆よりするソ聯の勢力に對抗した。

英國はまた一方新疆における民族の複雑、宗教の不統一に乘じ、國民を煽動しては變亂

を起さしめ、又西藏人の喇嘛教と印度人のバラモン教が新疆において相當勢力あるを利用し、且つ南新疆における印度人が各界を通じて少なからぬ勢力あるを利用して彼等を新疆侵略の道具に使ひ、宣傳隊員として或はスパイとして英勢力の擴張につとめた。

一九三三年一月、南新疆喀什噶爾に樹立されたサビト・ドムラを首班とする回教徒の獨立政權の如き、イギリス側の使嗾支援によつたことはいふまでもなく、イギリスはこの政權を盛り立て、南新疆の獨立を策し、ソ聯勢力の南侵を防壓せんと試みたが、越えて二月かの叛軍の首領馬仲英が迪化攻圍戰で盛世才の反撃に遇ひ、一敗地に塗れるに及び、同略什噶爾政權またいつしか解消しサビト・ドムラは行方不明となるといふ始末で、折角のイギリスの意圖も水泡に歸してしまつた。

次いで同年七月末に至り馬仲英は南新疆に遁走し、武装解除の上彼自らまた露領に護送さるゝに及び、南新疆はソ聯の傀儡たる盛世才の統一するところとなり、イギリスの南新疆における勢力は俄然動搖を來し、その新疆におけるソ聯との抗争は遂にイギリス側の敗

北に歸した形となつた。

新疆における對露抗争に敗れたイギリスは、やがて馬首を轉じて西康への進出を企圖した。併しそれは、嘗て内地に向つて行はれたる武力侵略とは異つて、宗教を旗印として先づ土民を懐柔し、徐ろにその勢力を扶殖するといふ新たな政策によつた。

(四) 英國の長江政策

一九三二年末から三三年始めにかけて、雲南の西南境に班洪事件といふのが起つた。英國の駐屯軍二千名がビルマから雲南西南境の班洪地方を占領した事件である(雲南の現勢班洪事件の項参照)。これは同地の鑛山を覘つたといふよりも境界線の未劃定に乗じ、往年の片馬と同様、これをビルマ領に併歸せんとしたと見る方が適切かも知れない。而してこれは「大西藏國」建設に關聯して、ビルマよりする西部支那進出路の一起點となるものである。

ロシアのソ領中央アジアよりするコミンテルン・ルートと同様、イギリスは印度及びビ

ルマよりする東方進出路を想定してゐる。印度より西藏、西康を経て四川に出で、長江を通じて上海に結びつかうといふのが、所謂英のヤンツー・ヴァレー・システムである。即ち、英の想定せる東方進出路は次の二線が描かれる。

一、印度のカルカッタより國境カリンブンを經て西康の拉薩に出で、西康の巴安、康定（打箭爐）を經て四川の重慶に出づる線

二、ビルマより雲南、西康を經て重慶に出づる線

つまりイギリスは、この二つの線によつて印度と上海を結びつけんと企てゝゐる。その西康侵略も雲南班洪の占領も、これが準備工作であると見てよい。

(五) 四川経略の魂膽

これより先、英國は既に早く四川に着目した。一九三三年、前駐支英國公使ランブソンは遠く四川に赴き、四川省政府主席劉湘を訪ふた。當時それは如何なる使命であるか不明であつたが、三四年の秋に至り、それが大問題となつて暴露された。

即ち劉湘は、自己の地盤擴張のため四川全省の鑛産を擔保に英國から五千萬元を借款しようとし、英國側はこれに對し、東印度會社の故智に倣つて重慶に一大鑛山會社を設立して、經濟的に四川を把握せんと企てた。幸か不幸か、この大借款は各方面の猛烈なる反對に遇つて頓挫し、劉湘は蔣介石の嚴重なる詰問に堪えず、一旦身を退き重慶の英國領事館の保護を受けたやうな始末で、頗る窮境に立つたものである。

ランブソン公使が四川に奔走したのは、單にこればかりではなく、何とかして四川を英國の勢力下に統一せんといふ魂膽であつた。その計畫に従へば、

(一) 先づ重慶——成都。重慶——宜賓。成都——宜賓間に鐵道を布設し重慶、成都、宜賓を聯結した三角形の鐵道網を形成して四川省の統一をはかり、

(二) これが竣工すれば、更に重慶より漢口に至る往年の所謂川漢鐵道を本格的に進捗せしめ、

(三) 一方成都より打箭爐（西康の康定）を經て西藏の拉薩に至るもの、及び宜賓より

雲南省城を経てビルマに至る鐵道を建設し、

(四) かくして雲南と四川、西藏、ビルマを連ね、こゝに所謂ヤンツー・ヅアレー・システムを完成する。

といふ段取だつたのである。ランブソンは次いで埃及に轉任し、これが實現は延期されたが、その計畫は決して放棄された譯でなく、寧ろますます積極的に進行してゐると見る方が至當である。

第六章 青海、西康の問題

(一) 青海一般狀況

青海は古來西域青海と呼び、甘肅省の管下に置かれたところで、完全な統治なく、部分的に統率された特別區域であるが、民國十七年九月、南京政府はこれに青海省なる省名を附し甘肅省西部の數縣をこれに編入した。青海の地域は支那の西北部に位し、北境及び東境は甘肅省に接し、東南の一部は四川省に、南部は西康省及び西藏に界接し、西部は新疆省に隣接する。

面積は約二四〇萬方支里といはれ、人口は極めて少なく、約十五萬と計され、その密度一平方支里約〇・六強の稀薄さである。

青海の境域は崑崙山脈の支脈たる巴顏喀喇山脈によつて二分せられ、北は黄河上流域、南は揚子江流域、北部は黄河流域、青海湖沿岸域及び西北柴達木平原に區別せらる。これ

等の境域は、青海湖面において、實に海拔三、〇二〇米を有する廣茫たる大高原をなしてゐる。東北部の山脈地帯なるに反し、西部は多く丘陵性多沼地帯で、新疆の沙漠地帯に連接する。省の東北部には有名な青海湖がある。湖は本名を庫庫淖爾コクコノールと呼んでゐる。「ココ」は蒙古語の藍又は青で「ノール」は海を意味する。青海湖の西南方にある鹽地は周圍五〇支里の小湖であるが、これまた蒙古語で達布遜淖爾ダブソンノール（鹽海）と呼んでゐる。この外柴達木平原及びそれより以西の地帯には鹽水系の湖沼が數多あるやうであるが、記録の明かなものがない。

青海は緯度においては山東、河南と同位であるが、高原地帯であるため寒氣甚しく、四圍の高峯は四時氷雪を頂き、夏季の溫度攝氏二〇度乃至三〇度、冬季零下一〇度乃至二〇度に下る。

住民は牧畜、狩獵を生業として居り、風俗は未開で慥悍粗野を免れないが、極めて純朴である。

統治状態は、巴顏喀喇以北は五部二十九旗に分れ、各旗に札薩克を有するところ、蒙古に似てゐるが、蒙古の如く各旗に盟長はゐない。省の南部地方は、各族の舊家が土司と稱して酋長の地位を占めてゐる。現在における支那中央部の官制としては、首都西寧に省會を置き、族部には理事員を設けることになつてゐる。

宗教は回教徒は極めて少なく、大多數は喇嘛教である。省内には各地多數の喇嘛等あり、その中でも通天河中流の結古寺、竹節寺、岡西寺、拉布寺など最も有名である。

青海湖邊及び柴達木平原は天然の良牧場をなし、夏季には綠草繁茂して、海拔四千餘米の高地まで放牧に適する。主なる家畜は緬羊で、その數も最も多い。その他牛、羊、馬、騾、驢、駱駝、豕等も飼育するがその數は緬羊に及ばず、これを統計的に見れば、青海省東北の極少部である青海湖邊のみでもその緬羊數六十三萬頭で、西部平原に駐牧する阿粗呼族の如き、一戸少なくとも一、〇〇〇頭を有するといはれてゐる。農産としては小麦、青稞、粟、黍、蕎麥などがあり、碗豆、蠶豆、馬鈴薯、その他野菜類をも産する。林産とし

ては柏、楊を主とし、松、樺、榆等がある。松、柏、楊、榆などの森林地帯は數十支里に亘るところがあり、十數圍もある老樹が少くないとはれる。鑛産は金、銀、銅、鐵、錫、鉛等があり、玉、礬砂、石膏、硝石、硫磺、石炭、鹽、矽砂、礬石などがある。

青海の都邑は首都西寧を除いては循化、都蘭寺、托羅伊、哈拉河洛など數へられるが、本省は今なほ未開の曠野であり、上述の如く畜産、鹽産の外見るべき生産なく、人煙稀にして都邑として發達せるものなく、産業的にもさして重要な意義を有してゐない。

(二) 佛國勢力の侵入

青海と密接なる關係を有するものはフランスである。英國が西藏、川康、ソ聯が新疆、外蒙にその極東進出路を開きつゝあるに對し、フランスは早く雲南をその勢力下に收めると同時に、この廣茫未開の青海に着目した。即ちフランスは南方雲南より川康を経て北進の途を拓くと共に、一方隴海線によつて東部から青海に至る路線を開拓しつゝある。

フランスと白耳義の利益は隴海線の鐵道借款によつて一致した。この線は甘肅省の首府蘭州から江蘇省の北部海州に至り、更に連雲港に延びて海口に出るものである。第一の協定は開封から河南府に至る汴洛鐵道として知られてゐる線に對するもので、その額は四百萬法であつた。第二のものは汴洛鐵道を双方に延長するための四百萬磅の公債の發行が含まれてゐた。この二つの契約はいづれも白耳義シンジケートとの間に締結されたものであるが、その持分の一半はフランスにおいて發行された。汴洛鐵道公債はフランス及び白耳義で發行され、隴海鐵道公債は白耳義だけで發行されたが、この隴海鐵道公債はフランス及びフランス官吏によつて作成されたフランスに對する債務表の中に見出されるものであつて、一部分はフランスのものと思はなければならぬ。隴海線が竣工した時は、かの雲南鐵道によつてフランスの勢力が全雲南に伸長したと同様、この線を通じ甘肅から更に青海へ向つてその勢力が扶殖さるゝであらう。現在この線は甘肅、蘭州を終點としてゐるが、將來はこれが青海の首都西寧まで延長されることは略々想像に難くない。

フランスの青海經路は右の如く鐵道路線の完成を俟つて本格的に進展するであらうが、これに先立ち、青海におけるフランスの經路は已に着々と進行してゐる。先般班禪喇嘛を歓迎すべく蒙古に來た青海代表の談話を綜合するに、青海におけるフランスの勢力は近く七、八年著しき進展を示し、首都西寧を中心に青海全省に至り、約三百の學堂と約一百の教會が建設され多數のフランス宣教師が入り込み、着々その地歩を築きつゝあるといふ。

(三) 西康問題の提起

西康は近年までその西半は西藏に屬し、東半は川邊特別區域で四川省の一部であつた。清代に一時支那領土となつた西藏は、やがて西藏自身の叛逆と英國の干渉により再び獨立するに至り、この地方は川邊特別區域として新たに區劃され支那中央政府に直屬し、支那と西藏の緩衝地帯として存在したが、最近西藏に對する英國の勢力が加ると同時に、支那政府の西藏攻略に對する根據地として存在して來た形であつた。次いで南京政府は民國十

七年（一九二七年）熱河、綏遠、青海、察哈爾と相前後して西康省建設の省令を布いたが、現在においても、その境界は一定せず、従つて面積人口など極めて不正確である。併し大體において面積約四〇萬キロ、人口約三〇〇萬乃至三五〇萬と計されてゐる。

西康の地域は山岳重疊、殊にこの四川、雲南、青海の界接する省境は巖石嵯峨たる峻峰を以て圍繞せられ、省内の最低地として知られてゐる巴塘ですら海拔八、二〇〇呎の高原にある。従つて省内は到るところ萬仞の山連り、千仞の谿谷に担まれる有様で、交通は全く原始的な不便さをそのまゝ止めてゐる。この地勢の險峻と交通の不便は支那中央政府をして西康問題に熱意を缺かしめ、同地が常に孤立的状態に置かれた所以である。

住民は漢人と土民であるが、その大部分は喇嘛教徒である。土民は大別して唐古特（西藏族）、唐古特蕃族（西蕃族）、摩些族、白夷族、獮々族及び蒙古族であるが、人口の二〇％は都市に、八〇％は地方に散在してゐる。康定、巴安の都市においては漢人が大部分を占め、甘孜、理化の都市においては西蕃人が多數を占めてゐる。喇嘛教を信するものゝ外

回教及び、原始的な自然教が信ぜられて居り、英國はこの自然教とその迷信を利用して侵略の魔手を伸しつゝある。

西康には金、銀、銅、鐵の鑛産及び石炭、石油、鹽等が豊富に埋藏されてゐるといはれる。金は原始的な採掘によつてゐるが、四川省と合し民國十九年には一五、八五〇兩、同二十一年には二〇、〇〇〇兩を産し、全中國の總産額の二割を占めたといはれる。鹽また鹽井縣、瀾滄との兩岸に多量の産出あり、その年産額は三百萬斤に達し、若しその規模を大にし製法を改良せば、年産額一億斤は容易であると報ぜられてゐる。

外蒙古及び滿洲の獨立、內蒙古の自治權確立、南新疆の叛亂等相繼ぎ、支那の邊陲漸く多事を極めんとするとき、西康僧民から西康救済を叫ぶ痛烈なる五ヶ條の陳情書が中央に提起された。

- 一、中央は大官を特派し、西藏との境界を劃然たらしめ後患を除去すること
- 二、省政府を速かに組織し、全西康を責任を以て管理すること

- 三、西藏より西康への交通及び内地への公路建設のために經費を支出すること
- 四、災禍救済金を支出すること
- 五、軍備を充實せしめ邊境を警備すること

以上の陳情書の内容は、内憂外患、寧日なき中央の統治力が、如何に邊境に及ばないかを證するに足るものであらう。一九三〇年かの大金寺事件が起つて以來、康、藏の紛糾はこれを導火線として展開し、英國は好機逸すべからずとし、西藏軍を使喚して西康に進撃せしめた。所謂康藏問題といふのがこれである。争亂は達賴の「暫時停戰條件」の提議によつて一先づ停止されたが、一九三三年の冬第十三世達賴の死と共に、班禪喇嘛は機を見て西藏に歸還せんとし、英國の西藏政策は俄然打撃を被るに至つた。

即ち英國は西康に對し、最近武力侵略より轉じて經濟侵略に、更に轉じて宗教侵略に移り、西康土民にとつて絶對力である宗教を利用して彼等の懐柔を企て、西康省金沙江地方を中心とし、各縣に自治教會を組織し寺院を建設して多數の英人宣教師を派遣し、一面聖

なる神の救ひを説くと共に、他面、世界人類を救ひ世界の平和を齎らすものはジョン・ブルの旗であることを力説して無智なる土民を導かんとしてゐる。

第七章 三色旗下の雲南

(一) 概 説

雲南省は西藏高原の東南に連り、地勢高峻、その高さ處は海拔一萬數千呎に及び、低きところまた三、四千呎を下らない。かくの如く地勢峻險で他省との交通不便のため古來長く支那の版圖に入らず、元明以來支那の派遣せる官吏、此の地に駐して清に至つた。

蒙古憲宗二年（一二五二年）元の忽必烈、兵を率ゐて雲南に入り、後理國を滅し大理路軍民總管府を設け段氏の子孫を以てこれを管せしめ、至元十三年（一二七六年）に至り始めて雲南行中書を置きこれを統べしむ。元滅びて明これを收め、洪武十五年（一三八二年）雲南布政司を置き十二府七軍民府一直隸州とし、これを管轄した。清代において雲南に十四府三直隸州五直隸廳を設けたが、僻遠の地には土司多く存在し、土司は一部族一地方を領有し世々その酋長を襲ひ地方官はこれに干渉せず、土司にして子孫絶え或は亂に遇ふ如きこ

とあらば、これを機としてその土地人民を収め普通の州縣に改むる方針をとつた。

清代には前記十四府三直隸州五直隸廳を置いたが、現今ではこれを廢して九十六縣とし四道を以て管轄せしめてゐる。

(二) 面積及び人口

雲南は支那各省中第二に位する大省で面積概算一四六、六八〇方哩、我國の本州四國九州北海道を合したるものより稍々小である。人口は稀薄で一方哩平均五十人に過ぎず、全省の人口總計七百五十萬乃至八百萬と見られてゐる。

雲南は歴史的には永く支那漢民族と關係なく、その人種も西藏、緬甸、暹羅系統に屬し漢人とは文物言語風俗を異にしてゐる。たゞ元以來漢人にして四川、湖南、廣東などから漸次この省に移住するものあり、現今では全省人口の半數以上は漢人と同一習俗をなし、元漢人でなかつたものもこれに同化してしまつてゐる。併しその西部、西南部一帯におい

ては各稱の苗族が居住し、西藏或は後印度系の習俗をなしてゐる。又雲南には、唐代より土耳其民族の移住し來つたものあり、殊に元以來は稍々多數の土耳其系統の者入り込み、回教徒と漢人との争ひが屢々起つた事實がある。

(三) 地 勢

雲南省は北境に揚子江の上流である金沙江があり、西部には西藏より來る瀾滄江及び怒江（一名潞江といふ）がある。前者はメーコン河となり後者はサルウィン河となり、共に緬甸に入る。省内に發源する河流の大なるものには南盤江、北盤江の二江がある。たゞこれ等の河流はすべて山峽を流れ、全く水利の用をなさない。

雲南府城（昆明）は海拔六千二百呎、東川府城は七千三百呎、蒙自は五千三百呎、思茅は四千五百呎、騰越は五千四百呎で、その他各地低きところも四千呎を下らない。省内の高山は一萬數千呎に至るものも稀れでない。一般の地勢は西部一帯緬甸、西藏に連る地方

において高く、南方佛領印度支那に連る地方は漸次低くなり、國境老開においては三百呎に下つてゐる。

(四) 交通

雲南省の交通路は、雲南省城を中心とし主なるもの六路ある。

- 一、雲南省城より東川、昭通、大關を経て横江に沿ひ四川の叙州府に至る。
- 二、省城より東川に出て貴州に入り、威寧、畢節を経て四川の叙永に至り赤水に沿ふて瀘州に至る。
- 三、省城より曲靖及び霑益を経て貴州に入り、興義府より廣西の泗城府百色に至る。
- 四、省城より東南に下り廣南を経て省界に近き割隘に至り、これより廣西百色に至る。
- 五、省城より楚雄、大理を経て騰越に至り緬甸に入る。
- 六、省城より南下し蒙自、河口、老開を経て佛領印度支那東京に至る。

右の中、第六路は滇越鐵道の開通により専らこの鐵道による。佛國が滇越鐵道を延長して省城に至つたため英國は緬甸より興越を経て省城に至る線を計畫し、省城より北四川に

出づる線は英佛の共に志すところ、省城より興義、百色、南寧、欽州の線は佛の計畫するところであるが、なほいづれも豫定線たるに過ぎない。

佛國が自ら建設したる滇越鐵道(雲南、海防間)は延長五二八哩、一九一〇年に開通し、その老開、雲南間の布設權は、一八九八年の廣州灣九十九年租借條約と共に獲得し、支那政府は鐵道所要の用地を提供して鐵道は全く佛の資本によりて布設し、これを佛國の所有鐵道とした。

この外欽州より廣西を経て雲南に出づる線路は、一九一四年佛の中法實業銀行が支那政府と布設契約を結んだものであるが、豫定に止まり未だに布設されない。その延長六七〇哩、又雲南省城より四川の成都、或は重慶に出でんとする鐵道豫定線は早く英佛の計畫せんとする所であるが、此の間の地勢は遽かに鐵道を布設し得べきものではない。

緬甸の八莫より騰越に入り大理に至る間は、一九〇五年より一九〇七年の間に英國政府の測量したるもので、八莫、騰越間一二二哩、騰越、大理間二六二哩、建設費合計四千二

百萬磅と計上されてゐる。

雲南省内量線は延長六、七七五支里あり、その線は左の如くである。

雲南省城——宣威——貴州省界	五〇五支里
省城——通海——蒙自——廣西省界	一、四七五
蒙自——蠻耗——河口	二九三
通海——思茅	一、二三五
省城——大理——騰越——緬甸國界	一、〇八七
永昌府——順寧府	三二〇
東川府——宣威	三一五
その他の支線	一、五四五
計	六、七七五

(五) 雲南の外交關係

雲南省と緬甸との國境は、一八九四年及び一八九七年の英清條約により規定し、これに

より兩國委員測量して決定せんとし、その騰越以南よりメーコン河に至る間の境界を確定したが、騰越以北、西藏に至る間は實地踏査をして居らぬ。當時決定した騰越附近の國境は大平河(海壩河)に注ぐ一支流南蚌河を以てし、これより南は南坎に至るものとした。然るに南蚌河以北西藏に至る間は、怒江と緬甸のイラワヂー河の分水嶺を境とするといふもこれを測定しなかつたため、遂に國境問題を惹起するに至つた。

一九〇五年三月より五月に至る間、騰越駐在英國領事は支那官憲と共に怒江とイラワヂー河との分水界を踏査し北緯約二十六度の片馬に至つた。然るにこの分水嶺以西の緬甸部族は分水嶺以東の部族と古來から相合してゐるもので、緬甸部族は東部支那部族に毎年貢物を容るゝ習慣あり、支那部族はこれを英領内部に強めて二者の紛争絶えず、こゝにおいて印度政府は邊境の不安を除かんがため、一九一一年兵を片馬に進めて駐劄せしめた。

然るに支那政府は片馬は支那領なればこゝに侵入すべからずといひ、同時に國境は分水嶺以西イラワヂー河の上流たるナムマイカ河であるを主張したので、英國はこれに對しま

た分水嶺以東、怒江沿岸まで英領であると論じ紛議決せずには、偶々辛亥革命起つて清朝が減んだので問題は未決のまま、今日に残された。

佛國と雲南の關係は、嘗て支那は安南が藩屬國たるを固持し、佛は安南を保護領としてこれを支那に承認せしめんとしたため清佛戦争起り、佛軍は臺灣の基隆を奪ひ福州を攻め澎湖島を占領したが、軍勢振はず安南でも支那兵のため抑壓せられたので、佛國は遂に屈服し、一八八五年天津において媾和條約成り、佛軍は臺灣及び澎湖島を支那に還附し、東京、雲南、廣西、廣東間の通商に關する條約が成立した。その後佛國は安南、東京に關し支那と條約を結ぶこと數回に及んだ。これを列記すれば次の如し。

一八八六年、海防河内を開市場とし支那人の安南海防における土地家屋所有を認む。一八八七年、廣東、廣西、雲南と佛領との間に境界を劃定し蒙自、蠻耗、龍州を開市場とす。東京との陸路通商における輸出税は海關規定率より減税す。一八九五年、佛國領土をメーコン河まで擴張し支那領の江洪一帯を佛に讓渡す。開市場を改めて蒙自、河口、思茅、及び龍州とす。支那は雲南に鐵道を布設する時、東京鐵道に連絡せしむ。雲南、廣西、廣東の鑛山開採には佛人を聘用す。一八八八年、東京邊界

及び海南島不割讓を約す。雲南府及び百色に至る鐵道布設權を佛に與ふ。一八九八年東京、雲南鐵道布設權を佛に與へ、同時に北海南寧鐵道布設權を與ふ。一八九九年、廣州灣租借條約決定、一九〇三年、雲南鐵道布設に關し詳細なる契約を締結す。

又雲南鑛山に關しては、一九〇二年佛國領事との間に契約あり、雲南省内の雲南府、潯江府、臨安府、開化府、楚雄府、元江直隸州、永北直隸廳の七處において次の各鑛を調査開採することを隆興公司 (Anglo-French Mining Syndicate) に許可した。

- (一) 官有にして現時荒廢せる銅鑛及び公司が発見する銅鑛
 - (二) 嘗て開採し現在荒廢せる金、銀、石炭、鐵等の鑛山
 - (三) 公司が発見する金、銀、石炭、鐵、白金、白銅、錫、石油、寶石、礫砂
- 但し同公司是、今日に至るまで何等の事業を開始して居らぬ。

(六) 雲南を旅して

雲南省は昔から「不毛の地」とか「蠻瘴の境」とか云はれ、支那でもとかく織子扱ひに

されてゐるところで、嘗ての督軍唐繼堯が雲南モンロー主義を唱へて以來、現在の省政府主席龍雲時代の今日でも經濟的には勿論、政治的にも支那本部から獨立してゐるかの觀がある。

省内は前に述べた通り殆んど山嶽地帯で、これも支那には珍らしい急峻な山が折り重なつて居り、平野といふのは、南方の蒙自附近と西の方の大理附近に少しばかりあるのみである。即ちその他は一萬尺を上下する高原地帯で、従つて交通といつては、雲南省城から佛領印度支那海防に行く佛國經營の滇越鐵道以外、どちらへ行くにも馬も車も通らぬ山道で、他省への往來はすべて徒歩による外はない状態である。

かうした高原であるから、緯度からいへば熱帯近くにありながら、氣候は極めてよく、年中、日本の五月位の陽氣で眞夏でも暑さを知らず、四季草花の絶ゆることがない常春の國である。又雲南は邊境の寶庫と目されてゐる程あつて鑛産の豊富なことは驚くべきものがある。即ち金、銀、銅、鐵、亞鉛、錫、アンチモニーをはじめ、石炭、硫黃、岩鹽、大

理石、琥珀、水晶、翡翠、ルビーなどいろんな鑛石が出る。殊に錫と銅は最も豊富で、南方の蒙自近くの個舊には有名な錫山があり、十萬人からの鑛夫が働いてゐる。

住民は漢民族が大部分で、滿洲人、蒙古人、回々、西藏人、それに多數の苗族が住んでゐる。苗族は主として山間僻地に部落を形成して居り、外部とは全然没交渉の生活を營んでゐるが、雲南に見受くるもの羅々といふのが最も多い。

筆者はすつと以前であるが、佛領印度支那から雲南を縦斷し、雲南省城に十日程滞在したことがある。その當時の旅行談を少し述べると、先づ上海から香港に行き、香港からフランスの汽船で佛領印度支那の海防へ上陸した。それから河内へ出で滇越鐵道で安南の最北部老開に着いた。この老開の對岸支那領に河口といふ街があり、河を以て明かに國境が劃されてゐる。

河内では別段珍らしいとも思はなかつたが、この國境の老開から雲南省城に至る鐵道沿線の山の中の至るところに、例の日本の娘子軍が佛人を相手に盛んに活躍してゐるのを見

た時は、彼女たちの勇敢さに聊か驚かされたものである。同時に、この國境の老開から雲南省城に至る三百三十杆の雲南鐵道を見て、フランス人の根氣とその雲南經略の熱心さに驚かざるを得なかつた。

この雲南鐵道は一八九五年、恰度今から三十九年前、佛國が清佛國境及び通商條約の修正にあつて布設權を得たもので、一九一〇年、今から二十四年前に建設されたものである。鐵道は國境から段々登り道になつて、標高四千尺から五千尺の山嶽重疊たる無人の境を縫つて行くので、有名なロツキー山の鐵道を彷彿せしむるものだといはれてゐる。恰度箱根の登山鐵道をもつとく長く、そしてもつとく高くしたもので、峩々たる險路を迂回に迂回して登つて行くのであるが、無數のトンネルとそり立つ岩山の今にも崩れ落ちさうな斷崖の縁を通る時は、壯觀といふよりも全く膽を冷やされる。小一時間も登つて下を覗いて見ると、千仞の谷底に先程通つて來た線路や驛が小さく見える。そうかと思ふと沿線の谷間の岩の上を幾十となき山猿の群が渡り歩いてゐるのも、この鐵道でなければ見

られない景觀である。

(七) 雲南における佛國の勢力

従前の雲南は、督軍唐繼堯が日本留學生出身であつた關係から省城雲南の親日熱は盛んなものであつたが、彼が亡くなり、苗族出身の龍雲が主席となり、その後滿洲事變などが起きて排日が盛んになり、安田洋行外二軒程あつた日本商店も學生に破壊され、戸根木領事代理を始め雲南在住の日本人二十餘名はたゞ一人のギリシア人の妻であるものを残し全部引揚げたが、やがて昭和九年六月に至り、戸根木領事等の決死的努力によつて漸く領事館の復活再建を見、一旦引揚げた日本人もまた漸次復歸しつゝある。

最近の調査によると、雲南府の人口は十五萬人で、省内の外人は五百人ばかりでアメリカ人がざつと百人（これは大部分宣教師である）他はすべて佛人である。雲南におけるフランスの勢力は雲南鐵道會社によつて代表されてゐるが、この外にも有力な輸出入商など

があり、勢力を張つてゐる。

一九三二年雲南を旅行したアメリカの新聞記者ウイルバー・バートンは、上海のチャイナ・ウイークリー、レヴュー誌に「雲南は滿洲と同じ道を辿るか」と題してその雲南視察記を掲載したが、その中に「佛國が意を決して、崩れかけた雲南府の城壁に三色旗を掲げると否とに拘らず、佛國は今や雲南省の咽喉を扼し、年々その勢力を加へてゐる」と述べてゐる。このやうな佛人支配下の雲南省に突如問題となつたのが、一九三三年の緬甸駐屯イギリス軍の西部雲南への侵入、所謂「班洪事件」である。以下雲南、緬甸國境紛糾の歴史及び問題となつた班洪事件の經過について概説する。

(八) 境界問題の紛糾

一八八六年、安南戦争に乗じ英國が巧みな機會と捉へて緬甸を占領し、その翌年英支緬甸條約が締結されてから今日に至る四十八年の間、雲南と緬甸境界に絶えざる紛糾を續け

た。それより以前、清の乾隆年間にも緬甸人が屢々雲南西南部の土司を侵し、清兵と戦ひを交へた故事がある。

英支會議において緬甸條約が締結された後、英國に直ちに雲南緬甸國境の調査に着手したが、清廷は疆吏と全然没交渉で、些しもこれに對する準備を施さなかつた。次いで光緒十七年雲南、緬甸間に争亂が起り、英兵は雲南境の騰衝附近に侵入し住民と衝突するに至つたので、清廷でも漸くこれらの地方に注意し、光緒二十年駐英使臣薛福成と英外務大臣ローズベリーの間に會議が重ねられ、雲南緬甸通商條約二十四條が締結された。

この條約において一部の境界問題は決定されたが、その北段境界と南段境界とは解決されず、後來紛糾をもたらす痛として残された。即ち片馬、江心坡は北段の未決定境界内にあり、今回事件の起つた班洪は南段の未決定境界内にあるのである。當時境界交渉の衝にあつた薛公使が、何故これら境界を完全に決定しなかつたかは後日の問題であり、且つこれがために絶えざる紛糾の種を撒いたのである。

この未決定境界の北段は、片馬、江心坡、戸拱、坎底等の各地を包括し、雲南西部騰越附近の尖高山より起つて康藏の邊境に至る廣袤數千支里に及ぶ地域で、その面積は殆んど江蘇浙江省に匹敵する。且つ同地方は物資豊富で、西南邊境の處女地であるのみならず、支那の國防上からいつても輕々に看過すべからざる地域である。昔時支那では西南の形勢を論ずるには野人山（江心坡、戸拱、坎底各地のある地方）を以て國防の關鍵としたもので、野人山の得失は雲南の安危に係はり、惹いては西南一帯の安危にも關はるとしたものである。

南段未定境界の班洪地方はこれを北段の片馬、江心坡、戸拱、坎底諸地が康藏の地位を牽制する重要なには及ばないが、班洪は鎮康縣、順寧縣、双江縣、瀾滄縣に通じその驛道は直ちに雲南省域に通じてゐる。現在英國側の交通線は、已に緬甸國境の工隆渡及び班弄に至り、蘭貢より二日で雲南境に達することが出来る。而も支那側からは十餘日を要する。即ち班洪が侵されたことは雲南省南防の大なる脅威といはなければならぬ。經濟價

値からいへば班洪は鑛産に富み、金銀はじめ美玉寶石の産出莫大といはれる。清の初め、雲南省石屏縣人吳尙賢は、此の地に茂隆銀廠といふのを開設して巨萬の富を致した事實があり、其の後この寶庫をめぐつて、いろんな騒亂が繰り返されてゐるのを見ても、同地方が如何に内外人の垂涎の的になつてゐるか、知り得られる。

(九) 班洪事件

一九三三年の十月頃である。印度總督府は緬甸にある英緬採銀會社（これはビルマの鑛山採掘會社で、資本金七百五十萬ルーピーといはれる）に命じて班洪における各種鑛産の標本を採取せしめ、これを印度に送つて化學分析を行つた。越えて十二月十四日、同會社の英國人技師七、八名が班洪にやつて來て同地の土民酋長など、何事か秘密に打合せをやつてゐたが、それから數日後、英國側はビルマ駐屯軍から突如二千名の軍隊を派遣して班洪一帯を占領してしまつた。同地を占領して英軍は更に附近に自動車道路を築造し、班弄

江に鐵橋を架設し、又附近に三十幾棟かの兵營を作り、無線電信を備へ付け、更に飛行場の建設に取りかゝるなど半永久的の工事に着手した。

英國側が何故かく早急に琴洪占領を企てたかについては、自ら他に理由がある。それは近年來雲南政府が雲南の金融整理にあたり生銀が缺乏するので早く班洪の銀鑛に着目し、嘗て民國十八年、農鑛廳から同地の情況を熟知する李景森を派遣して調査せしめ、又民國二十年には雲南官立の富滇銀行から再び李を同地に派して、胡蘆王及び土司と開鑛條件やその方法について商議せしめた。英人側はいち早くこのことを探知し、雲南政府に先鞭をつけられては折角の企圖も畫餅に歸するといふので、疾風迅雷的に緬甸政府に命令して同地の占領を敢行したものである。

英軍の班洪占領の報が傳はるや、今更の如く驚いた國民政府外交部では、直ちに雲南の外交員をして雲南の英國領事に嚴重な抗議をなさしむる一方、駐英支那公使の郭泰祺に電命して即時英軍の撤退を要求せしめた。

たゞ支那側として最も厄介なのは、同地方の王族は勿論、大半の土民が英軍に味方してゐることで、英軍の侵入については歡迎こそすれ些かも敵意を有たぬことである。

英國側が班洪の占領を企てたのは、以上の如く同地の鑛産に垂涎したことが、主たる理由であるが、これ以外に、邊境の經路といふ一貫したる政策に基いてゐることを忘却してはならぬ。北段境内の片馬は、民國二年早く英軍のため占領され、拖角には官廳が設けられ、市場が開かれてゐる有様である。片馬以西の江心坡また民國十五年に占領され、最近では交通を遮斷し、支那人の入境を禁じてゐる。

更に又江心坡西北の戸拱、坎底をも同様の手段を以て經略せんと企圖して居り、英人の北段未定境界の經路は、事實上完成されたと見て差支へない。たゞ南段未定境界はなほその目的を達して居らず、幾度か支那側と劃界交渉を開いて依然紛糾を續けてゐる。この南段の劃界紛糾を、直接行動によつて解決せんとしたのが今回の班洪地方の占領である。

(一〇) 英國の進出路線

雲南邊境の事情に通曉する支那人の口吻に従へば、印度は英國の生命線である。同時に英國は、揚子江流域において重大なる經濟利益を有してゐる。英國政府の迷夢は、如何にしてこの印度と揚子江流域を繋ぐかといふにある、英國の極東における海上の交通線は日本のために截斷せらるゝ恐れがある。即ち英國は陸上の交通線を考ふるに至つた。

この陸上の交通線は、(一)印度より西藏に出づる線、(二)緬甸境より雲南、西康、四川に出づる線である、つまり英國はこの二線によつて揚子江と上海を把握することが出来るのである。最近英國が南新疆の争亂と西藏軍の西康進撃を企圖し、一方班洪によつて南段の境界線を定めんとしてゐるのもこれがためである。

英國の極東陸上線は第二線たる緬甸より川康に通ずる方が便利である。現在の自動車路は戸拱地方の猛緩に通じてゐる。この自動車路は江心坡以西の坎底、戸拱地方の經略のた

め築かれたものである。かくの如く英國が毎年莫大なる資金を投じて西南邊境の交通路發展を企圖してゐるのは、かの佛國が一億五千萬の巨資を投じて滇越鐵道を建設したのと同巧異曲である。即ちこれを以てしても、英國の班洪占領の意圖が奈邊にあるか、窺はれる譯である。

雲南の寶庫が招いた今回の班洪事件が如何なる結末を告ぐるかわからないが、英國の企圖するところが單なる鑛區占領のみではなく、上述の如き一貫せる政策に基く陸上交通線の把握にありとするならば、問題は決してこれを一局地の利益争ひのみ輕視することは出来ない。單に雲南問題のみでなく、最近英國の邊疆支那に對する行動が漸次活潑となつて來てゐるのを見ても、その極東政策は遠大なる意圖の下に一貫せる進路を辿つてゐることが窺はれる。

第八章 中國共產軍の邊境移動

(一) 瑞金放棄の前後

一九三四年十月末、中國共產軍朱德、毛澤東の主力部隊約十萬が、嘗ての赤都瑞金を放棄して一路西遷コースを辿つてからこゝに一載、彼等西遷部隊は、沿途蔣介石の追剿軍と激戦を交へつゝ、湖南々境を過り、廣西北境を突破して貴州に入り、一たび烏江沿岸より四川重慶に入らんとしたが中央軍の防陣固くして果さず、已むなく貴州路を西して雲南に入り、轉じて金沙江に沿ふて長驅北進、四川成都の西北理蕃に辿りついたのが本年七月初めであつた。懸軍實に二千哩、江西南部より四川北境までの逃避行、その血に彩られた赤い足跡は彼等の苦難の一大試練であつたと共に、やがて来る第二次飛躍の前奏曲であり、まさに中國共產黨戦史に特筆大書さるべきものであらう。以下朱、毛主力部隊の入川以後、即ち本年七月以降現在における共產軍の動靜を示し、今後の行動について研究して見る。

スターリンは嘗て『支那共產軍の寢據には四川省が最適である』と豫言した。今日の共產軍の移動はスターリン・コースの實現へ向つてゐるものである。支那共產軍は從來トロツキー・コースをとつてゐたし、コミンテルンとの關係はその地理的理由から十分ではなく、一部ではその無關係さへ傳へられてゐたほどである。而してコミンテルンの間でも、一部の分子は熱心にこれに働きかけようとはしたが、スターリンの一國共產化政策と、ロシヤ自體の五ヶ年計畫その他の建設に熱心なため、餘りかへり見る餘地もなかつたのである。

然るに一九三一年の九・一八事件以來、南京政府の動搖によつて共產軍の飛躍はモスコを刺戟し、コミンテルンは秘かにこれに指導を與へようと努力した。熱河戰當時共產軍の一部では、南京政府に對し『支那ソヴェト區の保證を條件として抗日軍として出征すべし』と、公然呼びかけるといふ策さへ提唱し、嘗て國民黨がとつた容共政策の舊夢を繰返す魂膽さへ現れてゐた。コミンテルンはこの動きに對し神經をこがらし、その干涉が急

角度にうるさくなつて來た。

これより先、上海事變のごさくさにまぎれて、第三インターの印度國籍代表ロミナーツ（支那名—羅納茲）が共產區に來り、つぶさに視察の結果、所謂大都市進出とコミンテルン・ルートのコースが誤てることを指摘し、江西は共產軍の根據地とするは妥當でないを報告した。その後彼はモスコに歸來、支那共產軍の指導に關し、コミンテルン・ルート完成論即ち支那共產黨はすでに成熟し、獨立で大都市を共產化し、福建方面に進出し、支那の西部から中南部を抜け海岸に達する地域のソヴェート化を主張するものに對立した。彼は現在のソヴェート區は必然的に經濟窮乏により、共產陣營は凋落すべく、早く瑞金を放棄して、地大物博な四川省に移り、永遠の策を樹つべきであると論じた。

かくてコミンテルンの内部では、所謂「コミンテルン・ルート」と「ロミナーツ・ルート」の激しい論争があつた。

一方支那共產軍陣營においても「コミンテルン・ルート」派の毛澤東等瑞金政府首脳部

と「ロミナーツ・ルート」派の周恩来、李特（ロシヤ人）が對立論争を續けた。瑞金政府首脳部のコミンテルン・ルート論者も、昨年夏以來、蔣介石軍の包圍策戦により經濟的窮乏を如何ともし難きをさとり、何等かの打開策を考へざるを得なかつた。

一九三三年秋福建事變が起るや、彼等は諸軍閥の混戦を益々激化すべく、政治の危機は愈々緊迫し、國民經濟は破滅し社會不安は一層深刻化し、革命の客觀的條件は成就したとの見地から、ソヴェート區の擴大のチャンスとなし、これにより瑞金政府の危局を脱すべく決心した。かくて福建政府と合流を企圖し、條件交渉中早くも福建新政府崩潰し、首脳部の見透しは完全に失敗であることが證明された。一方、朱德、彭德懷、徐向前、賀龍等の實力派は蔣介石軍との決戦を見合せ、ソヴェート區の經濟的困窮は一九三四年に入つて益々加重された。こゝにコミンテルン・ルートの政策は破綻を來した上、一九三四年十月には「ロミナーツ・コース」論者の周恩来、李特等は毛澤東等首脳部の「コミンテルン・ルート」破砕に爆撃し、兩者激論を戦はした。

この論争の結果は、客觀的情勢に對する周等の認識の正しさが勝ち、毛澤東等は十月初瑞金で行れた共產軍政府臨時會議で「共產軍今日の頽勢は毛等の政策の責任である」と痛撃されて、瑞金放棄、四川移動が決定したのである。これよりさき、賀龍、蕭克、李明瑞の聯絡運動が行はれてゐたが、瑞金放棄決定後この聯絡運動は徐向前を加へて、支那ソヴエートの四川移動の道ならしに變つてしまつたのである。

かくの如く共產軍の四川移動は、單なる蔣介石の壓迫を逃れてゐるのではなく、彼等の一つのコースとして現れたものであることが明かにされた。かくてこの移動決行によつてトロツキースト李立三のコースをとつた支那共產軍は、ロミナーツ、周恩來、李特の活躍によつて、スターリン・コースに統一され、コミンテルンの指導が從來より強力に行はれることになつたのである。

(二) 入川以後の現勢

(イ) 朱、毛及び徐向前部隊（四川、甘肅方面）

六月末から七月初めにかけて四川西北理蕃に辿りついた朱德、毛澤東の主力部隊は、同地に於て東北より來れる徐向前部隊と合流して強大なる勢力となり、同地方を中心に四川共產區建設を企圖するやに見えたが、その後何故かこれを放棄し、七月二十日頃より北方へ向つて移動を開始、七月末には松潘一帯を占據した。同地に於て一旦隊形を整へ、八月初めから更に甘肅へ向つて北進を開始し、先頭部隊は八月十五日甘肅の南境西固に到着、同地に於て、陝西南部から來た徐海東の先頭部隊と連絡した朱、毛主力部隊は、いまなほ松潘を中心とする川北地區に蟠居してゐるが、いづれも遠からず全部甘肅に入るものと見られてゐる。主力部隊の北遷が遅れたのは地理的關係からで、川北松潘から甘肅に入るには海拔數千米の岷山々脈の大分水嶺を越えねばならず、而も同地方の交通は異常の險阻を以て知られ、砲車その他の運行容易ならざるためであらうと察せらる。

政府軍の報道によれば最近（九月初旬）匪の一部隊が再び旋回して理蕃、懋功に出現したと稱して

ある。これは主力部隊が今なほ松潘一帯に徘徊し全部が出境して居らぬ證左だと見らる。なほ八月末までの政府軍の報道を綜合するに、四川における討匪状況は左の如くである。

△岷江西岸の匪は天成山一帯に據り、目下大なる戦闘なし。△瀘縣、懋功の道路は已に不通となつてゐる。△中央軍は目下松潘に向つて増援隊を派遣してゐる。甘肅軍また境界線に配兵した。△卓克基の匪部は中央軍第二路の進攻により三路に分れて竄退し、一は梭磨に一は大藏寺に一は松岡に走つた。中央軍の前衛は進攻して渭門關、方寨子等の地點を占據し保壘を築いて扼守してゐる。△楊森部下の懋功攻略により匪軍は撫邊に退集し、大坡一帯に保壘を築いて抵抗したが楊軍は分路進攻して土坡を占領し、更に猛攻を續けた結果二晝夜に亘る激戦の後魏字山を占領し、勝ちに乗じて進軍、一部は撫邊を占領し目下潘家山に向つて追撃中である。△一方川康軍劉文輝の部隊は過般共兩陣線を突破し得勝梯を占領した。匪の抵抗猛烈なるにより討伐軍は拳銃隊を以て猛襲し多數の匪を擊殺し、勇躍して土司官寨に進攻激戦三時間の後多丹噶及び土司副寨を占領、匪は上流地方に進竄した。△これによると朱、毛の主力は已に松潘以西の窓河、雅爾隆河、毛兒蓋河等の地點に遁竄したものゝ如く、そのよく北竄、甘青に至らぬのも地勢の阻むところと同時に國軍胡宗南及び薛岳兩軍の阻止によるものと信ぜらる。△討伐軍は目下成都平原防守のため北は松潘の東方地區に胡宗南軍、次いで第五路軍、

茂縣を中心に第六路軍、汶川に第三路軍、その西方に第一路軍、懋功を中心に第四路軍、川南から西康丹巴にかけ西康軍と弓狀陣形をとつてゐる。

(ロ) 徐海東部隊(陝西、甘肅方面)

徐海東軍は七月二十日頃陝西の首都西安の西、鄂縣、盤屋附近に達し、更に西進を續けて八月五日頃には甘肅省境に侵入、遂に長驅して甘肅省の天水(秦州)靜寧を占領した。その一部は更に西進して甘肅西固に來り、朱、毛軍の先頭部隊に合流した。徐海東軍の兵力は一萬五千乃至二萬前後と稱せらる。

政府軍報道。徐海東は本年七月中旬部下三千餘名を率ゐて西安の東南商縣、雒縣、柞水、鎮安方面を發し省城西安に向つて進攻の姿勢を示した。當時討伐軍の警備第一旅唐嗣相の旅團はこれと交戦して二團は全滅し、唐旅長亦捕虜となつて戦死した。その後匪は藍田を過つて終南山口から長安縣境西安を去る四、五十支里の引駕嶺を占領すること二日、あらゆる焚掠を擅にした。この外他の一部隊は子午口から竄出し西安は一時危急に頻したが、次いで綏靖公署部隊の力戦で危きを免れ匪は山に沿ふて西進、鄂縣、盤屋一帯に蟠居してゐたが再び政府軍の追剿により勞峪口から山中に竄入し、次いで

その一部隊は八月三日鳳縣の双石舖より甘肅南境兩當徽縣成縣一帶に竄入し引續き南下しつゝあるがその行動より察すれば、近日北竄中の四川部隊と合體を策してゐるものと思はれる。△九月八日西安よりの報告によると徐海東の一部隊は目下崇信、靈台（いづれも甘肅東部省境）において馬鴻賓師及び第六師の丁旅と激戦中である。徐匪の行動を按ずるに更に進んで慶陽を占領し北は寧夏を窺ひ、東は陝北共匪劉子丹隊と合流せんとするものゝ如し。

(ハ) 劉子丹部隊(陝北方面)

陝西北部劉子丹の部隊は目下延長、保安、延川、安塞、安定の五縣を完全に占領してゐる。兵力一萬四、五千でその主力は八月十日頃より甘肅方面へ移動を開始した。一方その支隊は九月上旬山西に侵入し、孟門鎮對岸刑家莊慕家垣一帶にて山西軍方克猷旅と交戦中である。

陝北における共產軍は紅軍二十六軍で小銃は一萬餘挺に過ぎず、而もその中使用に耐ふるものは七千餘挺位で、軍長劉子丹は三ヶ師を統べその記號の如きすべて討伐軍を模倣して居る。一師は劉自ら兼任し主力三ヶ師の下に十四個遊撃支部がありその外各小隊に分れた無数の赤衛隊より成る。△陝北

における討伐軍の兵力薄弱で加ふる交通不便、討伐容易でなく共匪の勢力はそのためによく擴大するばかりで現在の陝北の状況は恰も民國二十年頃の江西省に彷彿たるものがある。△更に陝西において重大なることは農村赤化問題である。農村の赤化は陝北の方が遙かに陝南より甚しく、殊に陝南は匪區小さく且つ暫定的のものであるに反し、陝北の西區は擴大なる地域に亘り、而も永久的の根據を有してゐる。先般閻錫山氏の報告に據れば山西省界の十數縣陝西の十八縣は共匪のために占據され陝西の二十三縣の中、八縣は完全に赤化し半ば赤化状態にあるもの十數縣に上り、赤化せる人民七十萬紅軍二萬、赤衛隊二十萬に達するとあり、井岳秀が討伐な擔任せる舊榆林府屬の五縣及び米脂縣が稍安定を保つてゐる以外、綏德以南延安、鄜州一帶七、八百支里の間は交通斷絶してゐる外、最近最も危険なるは延安城の運命で同地に駐屯する井、高兩師部隊は月餘に亘つて通信を斷つてゐる。これを以て延安以南の情況は推して知られ、陝北地區縱橫數百支里の間は殆んど完全に赤化してゐると見做してよい。

(ニ) 賀龍、蕭克部隊(湖南西北方面)

久しく湖南西北省境に在つて戰略的有利地點を占據せる賀龍、蕭克の共產軍は、目下全力を擧げて湖北宜昌下流より長江の敵前渡河を敢行せんとしてゐる。賀龍はこれがため、

遊撃隊を指揮して湖北、湖南、四川、貴州の四省境山岳地帯に兵力を集中しつゝこれが強
化策をとつてゐる。これまで賀龍部隊の移動は目下四川、陝西共產軍が甘肅侵入中である
ため、中央に對する牽制策であつたが、朱、毛部隊の四川入成功により已にその使命を果
し、その後を追ふて陝甘侵入を企てんとするものゝ如くである。

(ホ) 高俊亭、徐彥剛部隊(湖北方面)

過般湖北省大冶、武穴一帯に進出した高俊亭軍の一部は、江西省瑞昌附近へ逃亡してを
り、兵力は三、四千である。同じく湖南、湖北省境に在る徐彥剛は兵力四、五千で大して
活動を行つてゐない。

以上は本年七月以降現在に及ぶ共產軍動靜の大體である、これに對する討伐軍の狀況は
左の如し。

(三) 中央剿匪軍の狀況

蔣介石の剿匪軍本隊は、四川においては松潘一帯に蟠居する朱、毛、徐向前の主力に對
して岷江の線に沿ふて防備を固め、前述の如く岷江上流の北方から第五路、第六路(茂縣)
第三路(汶川)、第一路(汶川の西方)、第四路(寶興)西康軍の順に包圍陣を布いてゐるが、
剿匪軍には積極的の戰意なく、むしろ赤軍の北方移動を見送つてゐる状態である。

陝西方面の徐、劉、共產軍に對しては、かつて七月二十七日西安に剿匪會議が開かれ、
三省剿匪司令張學良以下于學忠、楊虎城、王以哲、龐炳勳、孫楚、李生達、高桂滋、孫蔚
如、馮欽哉、井岳秀(副師長李藩侯代理出席)及び軍分會より陝北參謀團主任毛侃新編第
一軍々長鄧寶珊等が参加し、今後の聯合討伐につき打合せを行つたが、別に具體的作戰の
決定はなかつたものゝ如くである。たゞその後、山西軍の入陝、剿匪部隊孫楚の第三旅が
太原を發して八月末汾陽河を渡つたとの報告あり、孫部の後に李生達の部下が引續き入陝
すると傳へられてゐるが、山西軍の一部は、目下省境孟門鎮附近で劉子丹の一部隊と交戦
中なる如く、又毛炳文は九月四日西安より甘肅蘭州に飛び、省政府主席朱紹良と剿匪問題

につき重要な會商を行つたと傳へられてゐる。

この外山西省では、閻錫山氏が剿匪工作に關し第八十四師長高桂滋及び正太護路軍司令孫楚と協議の結果、太原保衛團並に山西省政府に陝西省境より西部山西方面へ侵入の虞れある共產軍防止のため、山西三十一ヶ村の青年を動員して剿匪保安隊を組織し、軍官を配して特別訓練を施し、これら青年より農民を指導して反共戦に備へることとした。

(四) 西北支那赤色聯邦の構成

朱、毛部隊をはじめ陝西共產軍が、その全軍の集結を俟つて、陝甘一帯の廣大なる地域に亘り一大赤區を形成せんとするものであることは略々想像されるところだが、彼等の行動たるや機を見て變に應ずる、洵に端視すべからざるものあり、果してその根據を陝甘地區に置くものか、或は更に北進して蒙古に進出するものか、目下の情勢を以ては輕々に豫斷するを許さない。朱、毛部隊西遷の當初は、その終局目的が四川に侵入し、同地におい

て一大赤區を形成するものであると傳へられた。而もそれは、スターリンの所謂『四川は共產軍にとつて最適の寢據である』といふ言葉に基き、更にこれがロミナーツ（第三インターの印度國籍代表）によつて指導されたもので、その四川入りは彼等にとつて最終目的の達成であると信ぜられた。

然るに彼等は、同地に到着し且つ徐向前軍との合流に成功したにも拘らず、今や四川を放棄して更に北方移動を開始してゐる。それには蔣介石が自ら成都に出陣して討伐の陣を固め、一方四川軍閥の統制把握に成功したので、彼等としても強敵蔣介石を目前に控へて赤區の構成に着手することの不利を悟つた結果、此の際寧ろ討伐圏外に去つて新たな地盤を開拓するに如かずとし、先づ甘肅南境の地町を選んだものであらうと思惟されるが、最近における徐海東軍並に陝北劉子丹軍の行動に徴するときは、彼等の目的とするところ僅かに陝甘一帯に止らず、長驅寧夏に向つて進路を定め居る如く、その意圖の遠大なるいよく、以て想像の外にある如くである。

尤も朱、毛の主力部隊が寧夏まで進出するか否かは疑問であるが、少くとも徐海東軍の現在のコースより見れば天水より靜寧、平涼を攻略し更に慶陽を屠つて一路寧夏に出でんとするものであると信ぜられ、劉子丹また陝北を出で、徐海東軍と合し、寧夏に集結せんとしてゐることが窺はれる。蓋し寧夏は新疆の迪化、外蒙の庫倫とを結ぶ三角形の一頂點にあたり、特に外蒙庫倫との連絡上緊要の地であるのみならず、西、新疆迪化との交通の要路にあたり、東、オルドス沙漠を隔て、綏遠を睥睨する要衝に位してゐる。即ちこれを以て察するに、今後朱、毛部隊の甘肅入りと共に彼等は甘肅、陝西、寧夏、青海の五省を連ぬる一大ソヴェート區を建設、これに新疆外蒙を連ねて所謂西北支那一大赤色聯邦を形成せんとするものであることは、殆んど疑ひを容れない。

彼等の移動には短波無電、或はソ聯飛行機による第三インターの支援あり、更にソ聯より多數の軍事委員が参割し居り、殊に北支問題以後、ソ聯の共產軍に對する援助は益々積極的となり、これを以て内蒙に進出する日本主義勢力に對抗する一方、更に共產軍勢力を

利用して内蒙北支の攪亂を企圖しつつあり、即ちその寧夏攻略はこれが根本方略をなすもので、寧夏は今後はおける内蒙工作の基點であると思はれるのである。

(五) ソ支攻守同盟の機

最後に、右共產軍の北進並に赤化新疆をめぐる残されたる重大問題がある。それは、如上の形勢から誘致されたるソ聯と支那の提携機運で、かつて北支事變最中、駐支露國大使ボゴモロフの北上と共に傳へられた露支攻守同盟説の真相である。

現在南京政府國民黨内部には、かつて孫文が採用したる聯露容共政策を再現し、ソ支提携を圖つて共產軍を政治的に解決し、これによつて保ち得た餘力を國內の建設と對日策に集中すべしといふ聲が有力となり、所謂對日接近主張と對立し、注目すべき動きを見せてゐる。特に先般モスクワにおける第七回コミンテルン大會の無法なる決議に對し國民政府が抗議を中止したことは、これら親ソ派の勢力が政府部内に豫想外に根を張つてゐること

が窺はれるのである。

國民政府では、すでにソ支提携實現のため、新疆におけるソ聯の活躍を全面的に承認する企圖を有してゐると信ぜらる。即ち駐露支那大使館附武官郭文儀が目下新疆視察を行つてゐるのはその一つの現れであつて、その報告を待ち、顔惠慶はソ聯當局と直接折衝するものと見られ、これが成行は頗る注目されてゐる。國民政府がソ支提携を企圖するに至つた裏面には、

(一) 甘肅、陝西の共產軍討伐が事實上不可能で、現に陝西、山西省境の共產軍討伐中の山西軍將領、孫楚、楊愛源等より西北の一定區域をソヴェート區として承認し、政治的解決を圖るべしと建言してゐること

(二) 農村疲弊の極點に達した今日においては、共匪討伐より、むしろ共產黨の採用し居る農村政策を倣用する外なき情勢にあること

(三) 感情的に日本牽制のためソ聯と結ばんことを主張する親ソ派の勢力が強化して來

たこと

(四) 實質的に見て、ソ聯領と異ならぬ新疆のソ聯勢力を承認しても、支那としては何等痛痒を感じぬのみでなく、名義だけでも主權を確保することは支那に有利であること

等の理由伏在してゐると解されるが、一方この機運に乗じてボゴモロフ大使並に北平にあるソ聯當局の暗躍は目醒しきものがあり、今後の動向は頗る警戒を必要とする。

製復許不



昭和十年十一月十五日 印刷
昭和十年十一月二十日 發行

「蒙古と新疆」奥附
定價 二圓五十錢

著
作
者

財団法人 亞細亞協會調查部
村 田 孜 郎

發
行
者

東京市神田區一ツ橋通三〇
黒 澤 正 夫

印
刷
者

東京市芝區濱松町一ノ一五
鷺 見 知 枝 磨

發
行
所

東京市神田區一ツ橋通
教養會館
電話九段(四)一五五

日

振替東京六〇七三一
日本公論社

(紙本製岩黒)

刷印堂友文見鷺



非常時日本國民の必讀書

蒙古問題研究の權威

財團法人 善隣協會調查部編三著

內蒙古—地理・産業・文化

【最新刊】(四六判上製) 價三圓五十錢 送料十錢

中國の壓迫、ソ聯の魔手、今や內蒙古は東洋のバルカンだ。內蒙古を注視せよ!

外蒙古の現勢

【新刊】(四六判上製) 價一圓 送料十錢

世界の眼は一齊に外蒙古に注がれてゐる。東亞の危機を憂ふるものは先づ讀め!

フリヤート蒙古の全貌

【新刊】(四六判上製) 價一圓 送料十錢

ソ聯はバイカル戦線の防備に餘念がない。フリヤートは今や日本の最大關心事だ。

吉村忠三著【五版】價一・八〇 送料一・二〇

日露の現在及將來

野副重次著【三版】價一・五〇 送料一・〇〇

ツランと日本の新使命

田原豐著【廿版】價一・二〇 送料一・〇〇

滿蒙の謎を解く

松浦剛譯【再版】價一・八〇 送料一・二〇

空襲と國民の生命

伊東銳太郎譯【十版】價一・二〇 送料一・二〇

第二次世界大戦來!?

由岐一著【新刊】價一・八〇 送料一・二〇

本邦石油史(附燃料問題と石油政策)

好評噴々・新刊重版書

クロフォード著・橋源太郎譯

新聞の實際問題研究

【最新刊】新聞は今日では、生活必需品である。然るに一般人は、この新聞に関する知識を殆んど等閑に附して顧みない。本書は新聞の實際問題研究書として最も權威あるもの、現代人の必讀書だ。(四六判美裝三六〇頁價一・五〇送料一・一〇)

モオリス・ラシアン著

JAPAN=日本の運命

【三版】外人の觀た赤裸々な日本! これこそ日本の運命豫言書! 伊東銳太郎譯(四六判美裝三一〇頁價一・五〇送料一・一〇)

加藤寛治閣下序・寺島証史著

日本海軍怒濤

【三版】燦然たるわが海戦史! 見よ、血沸き肉躍る熱血の大文章である。(四六判美裝五五〇頁價二・〇〇送料一・二〇)

安藤 徳器著【五版】價二・〇〇 送料一・二〇

趣味の維新外史

寺島 証史著【三版】價一・八〇 送料一・二〇

人情秘録維新前後

林 和著【三版】價二・三〇 送料一・二〇

實説江戸俠客傳

林 和著【三版】價一・八〇 送料一・二〇

秘説江戸一代女

河東碧梧桐著【五版】價二・〇〇 送料一・二〇

山を水を人を

伊藤金次郎著【五版】價一・八〇 送料一・二〇

新版お國自慢

東京市神田區橋本會館 日本公論社 振替東京六〇七三一 電話九四一五一

東京市神田區橋本會館 日本公論社 振替東京六〇七三一 電話九四一五一

★書店にて切品の節は宛直御注文さく

★書店にて切品の節は宛直御注文さく

蒙古問題研究家の必讀書

オウエン・ラテイモア著
後藤 富男 譯
四六二頁
一七〇圓

原著者オ・ラテイモアは、人も知る蒙古問題研究家として西洋人中の第一人者である。その刻苦撓まぬ研究と、弱少民族に對する燃ゆるが如き愛情とは、往々開化文明の美名に惑はされて、被壓迫民衆の苦惱を顧みざる所謂「蒙古通」とは、斷然その類を異にしてゐることがはつきり認められる。蒙古問題研究家の必讀書である。

善隣叢書

◆蒙古問題パンフレット◆

- 第一卷 蒙古とはどんな處か
- 第二卷 蒙古はなぜ何故救はねばならぬか
- 第三卷 新生を歩む内蒙古
- 第四卷 神秘喇嘛教

各冊定價 二十錢
送料 四錢

發行所

東京市淀橋區西大久保四ノ一七〇
財團法人 善隣協會

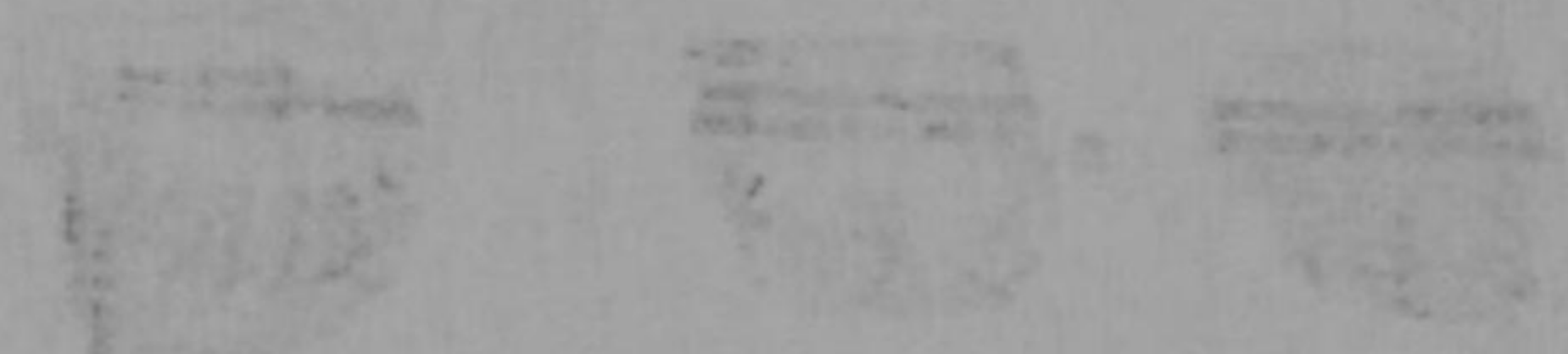
發賣所

東京市神田區 錦町二ノ四 益文堂
大阪市西區 阿波堀通四丁目 大阪寶文館

東京市神田區 錦町二ノ四 益文堂 電話九四一五
東京市神田區 錦町二ノ四 益文堂 電話九四一五
日本公論社 電話九四一五

★書店にての切品の節は本社宛直接御注文ください★

GANNANDO-SHOTEN
KANDA TOKYO
店書堂南巖



昭和十四年一月三十一日
十枚毎包
送

.....
A

